

櫛形町文化財調査報告書 No.2

上の山遺跡

1985. 3

櫛形町教育委員会

序 文

上の山遺跡は、櫛形町の西部に位置する上野地内にあり、以前より縄文式土器、土師器等の出土していた関係者周知の遺跡であります。昭和59年度に畠地帯総合土地改良事業の一環としてこの遺跡を含む、農道の整備事業が実施される事になり、町教育委員会では、工事に先立って文化財保護法に基づきこの遺跡の発掘調査を実施することになりました。その結果、縄文時代、弥生時代の住居址、方形周溝墓、土塙、時代不明の溝、それに伴う遺物等が多数出土しました。これらの貴重な資料が今後本町の歴史をひもとくいとぐちとなりアヤメの里づくりをめざす、本町のふるさとづくりに役立つ事を願っております。最後に今回の発掘調査ならびに報告書の作成にあたりご指導、ご協力いただきました皆さまに心から感謝申し上げる次第でございます。

昭和60年3月15日

櫛形町教育委員会

教育長 河野 豊

例 言

- I 本書は畠地帯総合土地改良事業に伴う上の山施設発掘調査報告書である。
- I 発掘調査は昭和50年5月21日から同年8月4日まで実施した。出土品の整理等は昭和60年2月1日から同年3月15日まで行った。
- I 発掘調査組織 調査主体 — 横浜町教育委員会
調査担当 — 清水 博
調査員 — 百瀬忠幸（東海大卒） 山崎和也（駒沢大卒） 吉岡弘樹（東海大）
事務担当 — 鶴田一雄（町社会教育係長） 石川利夫
- I 本報告書作成の業務分担は下記の通りである。
遺物の実測 清水、吉岡、小林、百瀬 遺物のトレース 出口、渡辺、百瀬、大森
遺物観察表の作成 吉岡 遺構図版の作成 出口
- I 石器の実測、分類、観察は、大森蔵志氏に協力を賜った。
- I 石質の鑑定は、柴山徹氏（都立上野高校教諭）に協力を賜った。
- I 本當の編集は清水が行った。執筆の文責は文本に記したが、主要な分担は次の通りである。
縄文時代の遺構と遺物 一百瀬、弥生時代以降の遺構と遺物 一吉岡、清水
- I 写真撮影、遺構については山崎、清水、遺物については近藤英夫氏のお手を煩せた。
- I 発掘調査、遺物整理において下記の方々に御助言、御協力を頂いた。記して謝意を表す次第である。
保坂直重（上野区長） 間根孝夫（東海大学教授） 近藤英夫（東海大学助教授） 来木 健（県教委文化課） 田代孝、新津謙、坂本義夫、中山誠二、保坂康夫（県埋蔵文化財センター） 中田英（神奈川県埋蔵文化財センター） 玉置貞之（灘防西中学校教諭）
- I 発掘調査参加者
藤本和弘（山梨学院大） 齋場宏、秋山昌克、有泉雅人、青木央、有賀清仁、芦沢文明、伊藤淳司、小笠原洋、藤田稔、川名高美子（山梨大）、佐藤千佳子（東海大）、野中新市、穂坂今朝春、野中つる江、河野芳子、古原なみ、桜田みえ、伊藤夢志恵、清水しづか、石川きみよ、石川ときじ、斐場よしみ、石川かねじ、石川いと子、石川しげ子、中沢栄、深沢道子、上田みな子（一般）
- I 整理作業参加者
小林洋（東海大卒） 渡辺順子（香蘭女学校卒） 出口萬由美（武藏野美術大学） 中沢栄、深沢道子、齊藤みや子、齋場啓子、河野裕子、上田みな子（一般）
- I 発掘調査時に作成された図面及び出土遺物は横浜町教育委員会において保管している。

凡 例

- 1) 遺構Noは原則として確認順である。但重複関係にあるものについては遺構が構築された順に従ってNoをふってある。
- 2) 採囲縮尺は原則として次の通りである。
住居址—1/40、同戸—1/20、土壌—1/40、1/20 構造遺構—1/100、1/40、集石遺構—1/30、土器尖端—1/4、同鉢軸—1/3、石器—2/3、1/3、1/6、石製品、土製品、—1/2
- 3) 遺構実測図における指示について。
遺構実測図の水系レベルは海拔高を示す。
方位は磁北を示す。
主軸方位は、主軸線と磁北とのなす角度です。
平面図中——は床面残存部、——は推定線、——は炭化物範囲を示す。
スクリートーン、インスタントレタリングの指示は次の通りである。
□ 焼土、炉 □ 一石、●—土器、○—石器
遺物は大数字で遺物番号を、小数字で床面からのレベルを示す。大数字は、本文、採囲、表、と一致する。
- 4) 遺物図版について。
□ —赤彩部を示す。

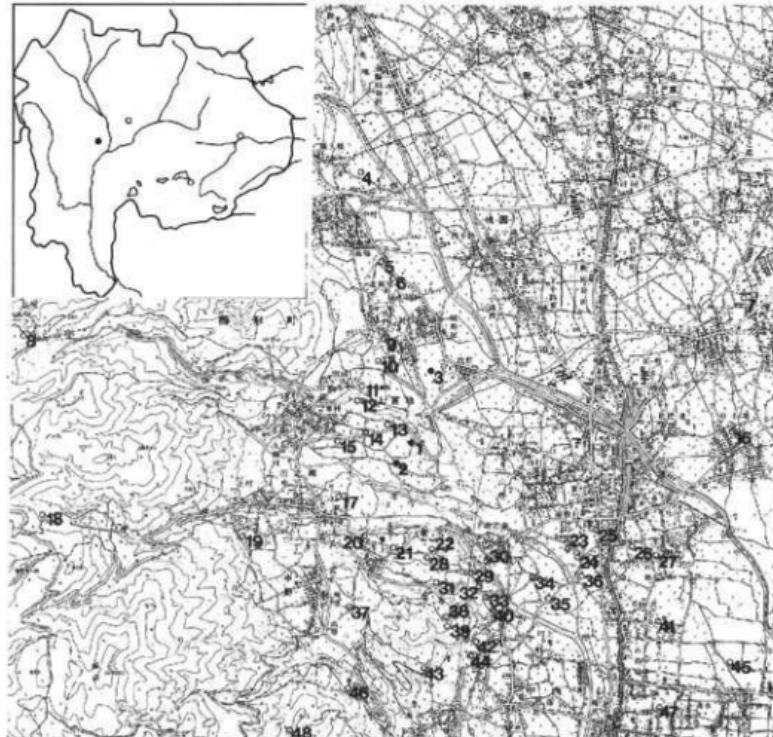
目 次

| | | | |
|--|-------|--|--|
| 序 文 | | | |
| 例 言 | | | |
| 目 次 | | | |
| I 章 調査に至る経緯 | 1 | | |
| II 章 遺跡の概観 | 5 | | |
| III 章 調査の概要 | 5 | | |
| IV 章 発見された遺構と遺物 | 6 | | |
| 1 節 縄文時代の遺構 | 6 | | |
| a) 住居址 | | | |
| b) 土 坡 | | | |
| c) 集石遺構 | | | |
| 2 節 古墳時代以降の遺構 | 26 | | |
| a) 住居址 | | | |
| b) 土 坡 | | | |
| c) 溝状遺構(方形周溝墓) | | | |
| 3 節 遺構外の遺物 | 41 | | |
| a) 土 器 | | | |
| b) 石 器 | | | |
| V 章 成果と課題 | 49 | | |
| 1 節 縄文時代の遺構と遺物 | 49 | | |
| 2 節 古墳時代以降の遺構と遺物 | 55 | | |
| 第1図 遺跡位置図 周辺道路分布図 [1km] | 1 | | |
| 第2図 遺跡地形図 [1km] | 2 | | |
| 第3図 遺構配置図 [1m] | 3・4 | | |
| 第4図 7号住居址遺物出土状態図 | 6 | | |
| 第5図 7号住居址及び印址 [1m, 1%] | 7 | | |
| 第6図 7号住居址出土土器 (1) [1%, 1%] | 8 | | |
| 第7図 7号住居址出土土器 (2) [1%, 1%, 1%] | 9 | | |
| 第8図 7号住居址出土土器 [1%, 1%, 1%] | 10 | | |
| 第9図 8号住居址遺物出土状態図 | 12 | | |
| 第10図 8号住居址及び印址 [1m, 1%] | 13 | | |
| 第11図 8号住居址出土土器 [1%] | 14 | | |
| 第12図 8号住居址出土土製品 [1%] | 15 | | |
| 第13図 8号住居址出土石器 [1%, 1%] | 15 | | |
| 第14図 9号住居址及び印址 [1m, 1%] | 16 | | |
| 第15図 9号住居址出土土器 [1m, 1%] | 17 | | |
| 第16図 3号、4号土坡 [1m] | 18 | | |
| 第17図 5, 6, 8, 9, 10, 11, 分土坡 [1m] | 19 | | |
| 第18図 7号土坡及び12号土坡 [1m, 1%] | 20 | | |
| 第19図 13号土坡 [1m] | 21 | | |
| 第20図 14号土坡及び16号土坡 [1m, 1%] | 22 | | |
| 第21図 土坡出土土器 [1%, 1%] | 23 | | |
| 第22図 土坡出土石器 [1%] | 24 | | |
| 第23図 1号集石遺構 [1m] | 25 | | |
| 第24図 1号集石出土土器 [1/4] | 25 | | |
| 第25図 1号集石出土石器 [1/5] | 25 | | |
| 第26図 1号住居址及び2号住居址掘り方 [1m] | 26 | | |
| 第27図 2号住居址及び印址 [1m, 1%] | 27 | | |
| 第28図 2号住居址出土土器 [1/4] | 27 | | |
| 第29図 3号住居址、掘り方及び印址 [1m, 1%] | 28 | | |
| 第30図 3号住居址出土土器 [1/4] | 29 | | |
| 第31図 4号住居址及び掘り方 [1m] | 30 | | |
| 第32図 4号住居址出土土器 [1%, 1%] | 31 | | |
| 第33図 5, 6号住居址及び掘り方 [1m] | 32 | | |
| 第34図 1, 2, 15号土坡 [1m] | 33 | | |
| 第35図 2号土坡出土土器 [1/4] | 34 | | |
| 第36図 溝状遺構(1) (1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 月溝) [1/100] | 35-36 | | |
| 第37図 溝状遺構(2) (4, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17分溝) [1/100] | 37-38 | | |
| 第38図 溝状遺構出土土器 [1/4, 1/5] | 40 | | |
| 第39図 遺構外出土土器(1) [1/5] | 42 | | |
| 第40図 遺構外出土土器(2) [1/5] | 44 | | |
| 第41図 遺構外出土土器(3) [1/5] | 45 | | |
| 第42図 遺構外出土土製品 [1/5] | 46 | | |
| 第43図 遺構外出土石器(1) [1%, 1%] | 47 | | |
| 第44図 遺構外出土石器(2) [1%, 1%] | 48 | | |
| 第45図 グリッド別縄文土器出土状況表 [1m] | 51-52 | | |
| 第46図 縄文時代遺構発掘区 | 54 | | |
| 概 察 表 | | | |
| 第1表 2号住居址出土土器觀察表 | 28 | | |
| 第2表 3号住居址出土土器觀察表(1) | 29 | | |
| 3号住居址出土土器觀察表(2) | 30 | | |
| 第3表 4号住居址出土土器觀察表 | 31 | | |
| 第4表 2号土坡出土土器觀察表 | 34 | | |

第1章 調査に至る経緯

権兵町上野区は、本町の西部に位置し古くから養蚕を中心とした農業地帯であった。この地域を昭和48年度～昭和60年度を事業年度とする畠地帯総合土地改良事業の一環として、昭和59年度に取りあげ農道の整備が計画された。この事業に伴い町教育委員会では、文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘調査を、山梨県農政部峡中土地改良事務所の負担金と昭和59年度埋蔵文化財発掘調査に係る文化庁及び山梨県教育委員会の補助を受けて昭和59年5月1日～8月4日まで現地調査を行った。調査の過程で多くの遺構や遺物が出土したが、予定通り無事に調査を完了する事ができた。

(鶴田一雄)

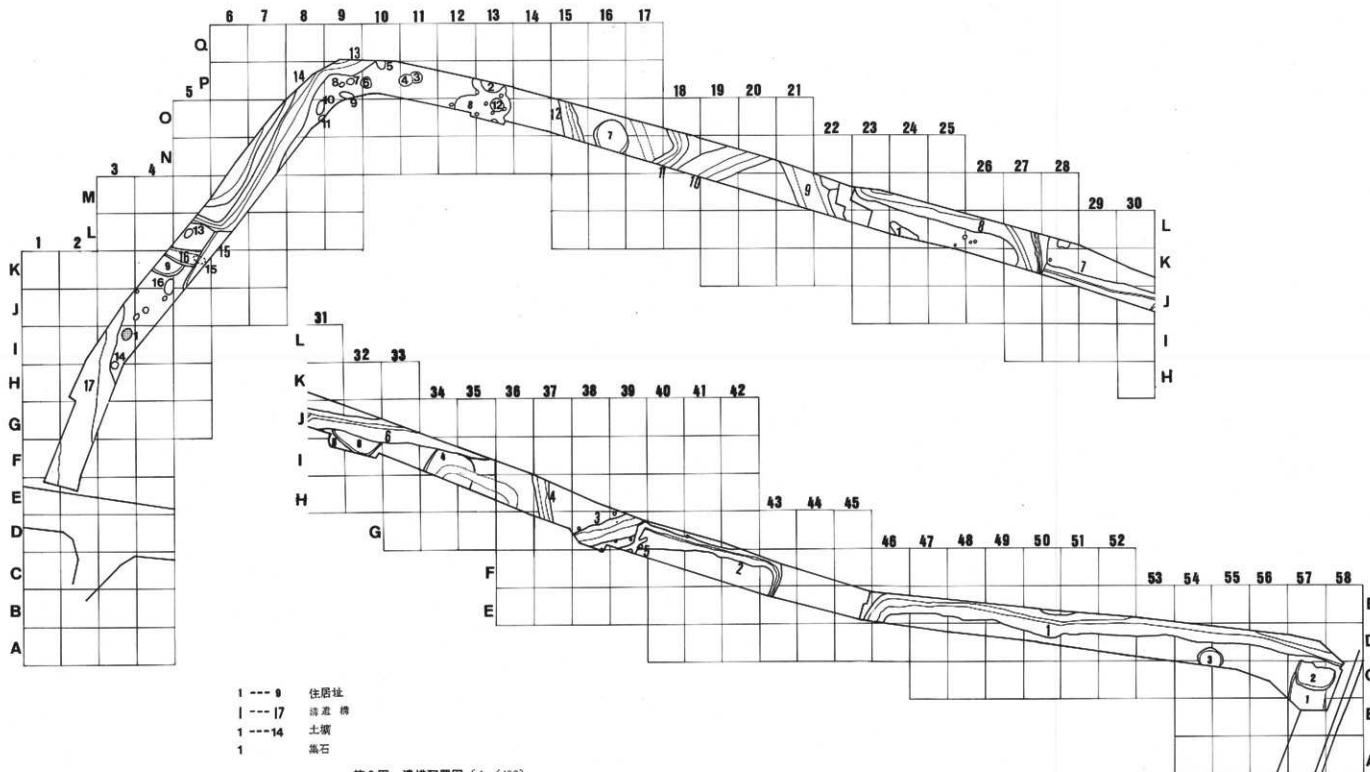


第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1/50000]

- 1-六糸丘古墳 2-六糸丘道路 3-伊豆池跡 4-渡船川遺跡 5-北野遺跡 6-高尾遺跡 7-十五所遺跡 8-高尾遺跡 9-御定石遺跡 10-御定石跡 11-伝御坂古跡
12-内原八幡宮 13-東原川遺跡 14-長田口遺跡 15-中田遺跡 16-新田遺跡 17-黒川遺跡 18-伊豆ヶ原遺跡 19-上村林遺跡 20-神代跡 21-下川原遺跡 22-1の里遺跡
23-内原遺跡 24-富士屋古窯 25-新崎北古窯群 26-下原地遺跡 27-江原遺跡 28-一上の東吉崎 29-物見原古窯 30-大保遺跡 31-上山遺跡 32-御田遺跡
33-日向地遺跡 34-川上地上遺跡 35-鳥羽御前屋古窓 36-御崎古窓 37-吉原駄遺跡 38-丸地方窓 39-丸坂古窓 40-上村古窓 41-船元遺跡 42-住村2号古窓
43-御崎山遺跡 44-住村1号古窓 45-生足遺跡 46-上の船遺跡 47-南木遺跡 48-土居平遺跡



第2図 遺跡地形図 [1/2500]



第3図 造構配図 (1/400)

第Ⅱ章 遺跡の概観

上の山遺跡は山梨県中巨摩郡柳形町上野字上の山に所在する。柳形町は甲府盆地西縁に位置し、西半部は柳形山麓及びその前面に発達した市之瀬台地が占め、東半部は盆地床縁辺に形成された扇状地形となっている。市之瀬台地は甲府盆地形成に伴った地殻変動による丘陵状地形であり、台地前面は100m程の比高差を持つ断層崖によって盆地と区され、前端には円頂丘が並んでいる。台地上面は幾条かの河川によって小支丘にわけられている。上野山丘陵は市之瀬台地の中央南寄りにあり、北を市之瀬川、南を堰野川に挟まれ、東一西に延びる丘陵である。丘陵縁辺は急斜面となり、先端部は小円頂丘が発達し上野山と呼ばれるが、更に東側は南北2つの小尾根に分かれ盆地床へ下降している。上の山遺跡はこの丘陵中部北側縁辺に占地し、東へ向い僅かに降る緩傾斜面上にあり遺跡東端には南一北に小谷が刻まれている。

「山梨県遺跡地名表」によると柳形町には29ヶ所の遺跡が記載されている。上野山丘陵上では、本遺跡に南隣し下河原遺跡が、西隣して伝椿城址が存在し、また小谷を隔てて東側の円頂丘上には上の東古墳が占地する。古墳北側には上の東遺跡が存在し、更に東丘陵先端には物見塚古墳が盆地を俯瞰している。市之瀬川を挟み、北側の六科山丘陵先端には、六科丘遺跡^①、六科丘古墳^②が存在する。この他台地上では、曾根遺跡、伝嗣院遺跡、長田口遺跡、原田遺跡、甲西町弘法場遺跡等、縄文時代を中心とする遺跡が知られている。東方平地部では、本町に於ては十五所遺跡、鑄物師屋古墳等が知られるのみであるが、甲西町に入ると江原遺跡、久保遺跡、住吉遺跡、御崎古墳群等、弥生時代から平安時代に至る遺跡が知られている。
(清水 博)
^③

第Ⅲ章 調査の概要

今回の調査は農道整備事業に伴うもので、発掘区は山4m、延長約250mに亘る。丘陵北縁に沿い約190m東一西に延び、西端で直角に折れ更に50m程南へ続いている。

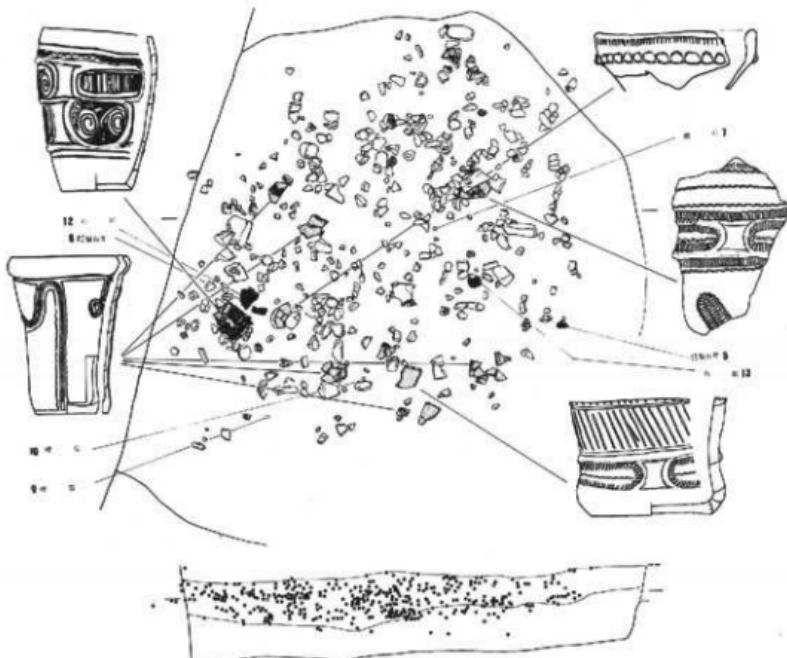
5月上旬に50cm巾のトレンチを11ヶ所設け試掘を行った。基本土層は4層に分けられた。第Ⅰ層は耕作土で20~40cm、第Ⅱ層は明茶褐色上で粘性、しまり共に弱く20cm前後堆積するが検出しえない部分もあった。第Ⅲ層がローム層で40~100cm程堆積し、第Ⅳ層が黄白色輕石層となる。Ⅱ層上面で5ヶ所の落ち込みを確認し、縄文式土器を中心とする遺物を多数検出した。

実質的な調査は5月下旬に開始した。調査方法はグリッド法を探り、調査区全域に4m方眼のグリッドを磁北に従い設定した。南北方向に南からA~Q、東西方向に西から1~58と呼称した。試掘の結果に従って、耕作土を重機によって排除し、以下は造構検出を行いつつ人力で掘り下げた。調査は発掘区東端から西へ向って行った。全体的に造構上面の削平が進み遺存状態は良好とはいえない難いが、多くの造構を検出した。検出した造構は住居址9軒・土括15基・集石造構1・溝状造構17本で、時代的には縄文時代から、中世にまで及んでいる。調査は多くの成果を残し、8月4日に終了した。
(清水 博)

第IV章 発見された遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構

a) 住居址



第4図 7号住居址遺物出土状態図

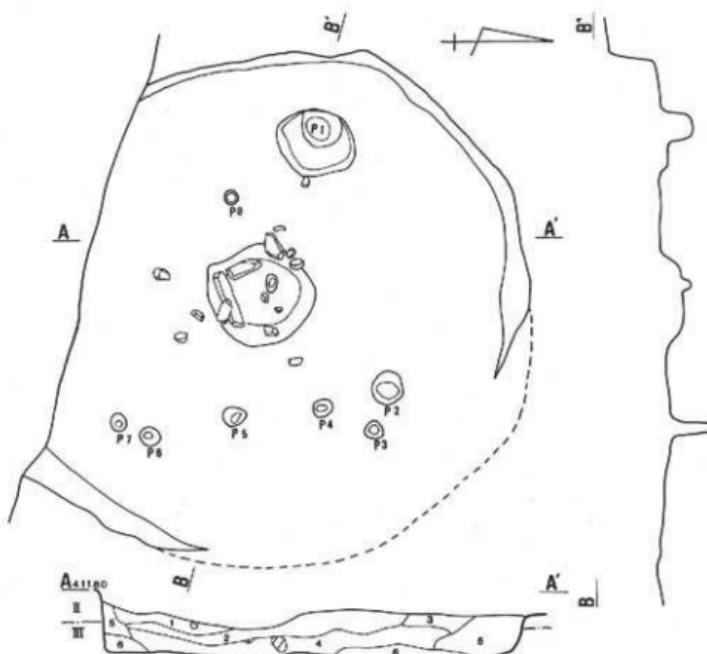
7号住居址 (第4~8図、図版2・3)

発掘区中央やや西寄り、16-N・0、17-N区に位置する。西10mに8号住居址が存在する。

住居址南端が発掘区外となり、北端を削平されている。

平面形は不整円形を呈し、規模は径3.7~4mを測る。

掘り込みはローム層中まで達しており、壁高は30cmを測る。覆土は6層に分けられ、自然堆積を示す。覆土上層には多量の土器、石器類及び礫が認められたが断面観察の結果に従えば、床面よりかなり浮いた状態でレンズ状に堆積している。検出された土器も原状を復元しうる④



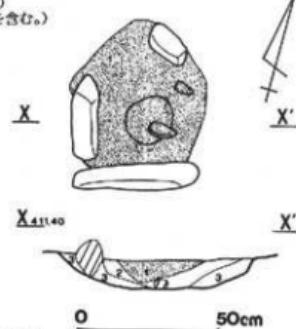
○ 1M 第1層：黒茶褐色土層
第2層：暗黄茶褐色土層
第3層：茶褐色土層
第4層：暗茶褐色土層（黒色土粒、ローム粒を含む。）
第5層：暗茶褐色土層（ローム粒を含む。）
第6層：暗茶褐色土層（ロームブロックを含む。）

第5図 7号住居址及び炉址 [1/40, 1/20]

をはじめ大きな破片を含んでおり、自然の流入とするよりも住居址埋没過程における癪瘻等、人為的集積であろう。

床面は堅緻だが、なだらかな起伏を有する。ピットは8ヶ所検出された。深さはそれぞれ15cm、60cm、25cm、12cm、36cm、8cm、26cm、24cmを測る。P1は西壁寄りに設けられ50×60cmの楕円形平面を呈し、底部は一段深く掘り込まれる。他のピットは径20~10cmの小型のもので、柱穴の特定はなしえなかった。

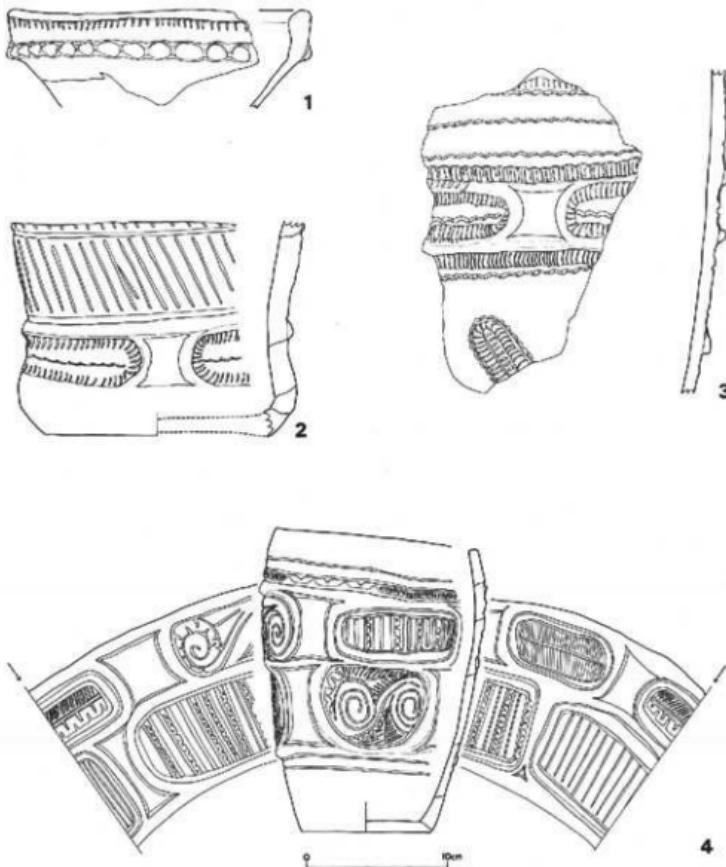
炉は住居址ほぼ中央に位置する。50×65cmの隅丸方形



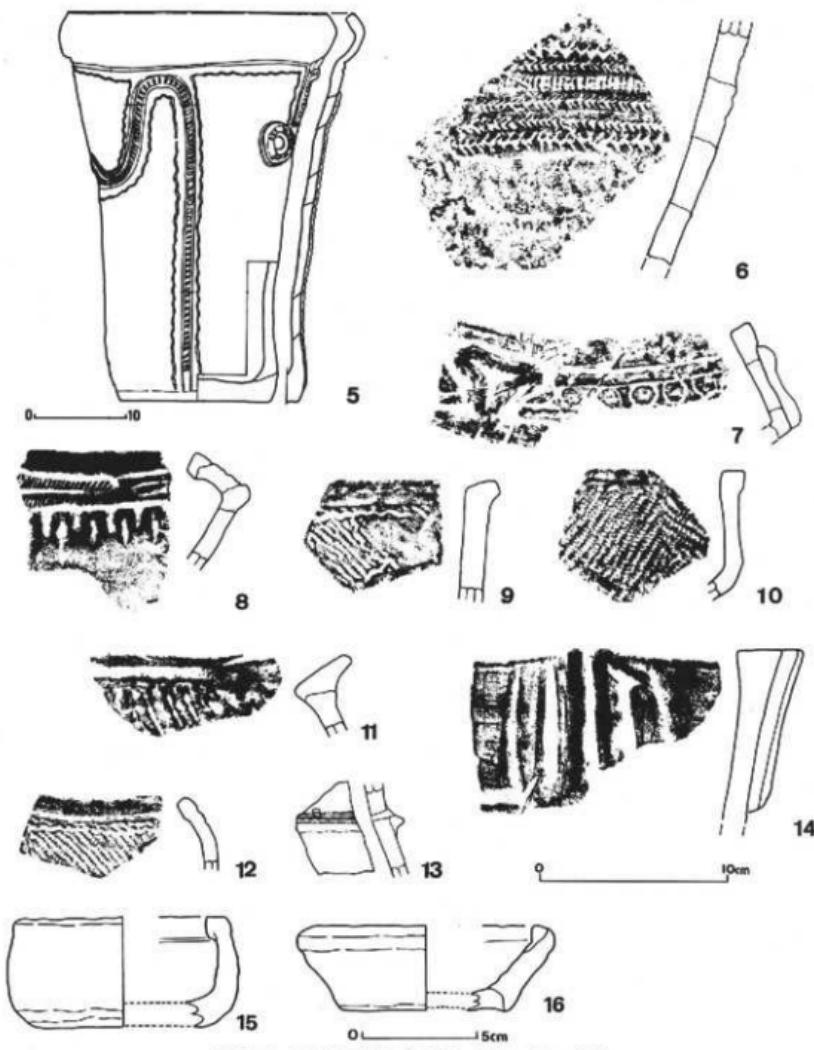
7号炉址
第1層：赤褐色土層（粘性質消しまりはやや強い。鐵土粒、鐵土物を含む。）
第2層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりは普通。鐵土性。ローム粒を少數含む。）
第3層：暗茶褐色土層（粘性やや強くしまりはやや強い。ローム粒を多量に含む。）

を呈する石圓炉であり、長角礫を西、南の二辺に直角に配している。他に炉内外から13個の小角礫が検出されており、炉石として使用された可能性も認められるが、炉周囲からは明確な抜き取り痕等は認められなかった。炉の掘り方は径160cmの不整円形を呈し、床面から10cm程掘り込んだ浅い皿状断面を呈する。

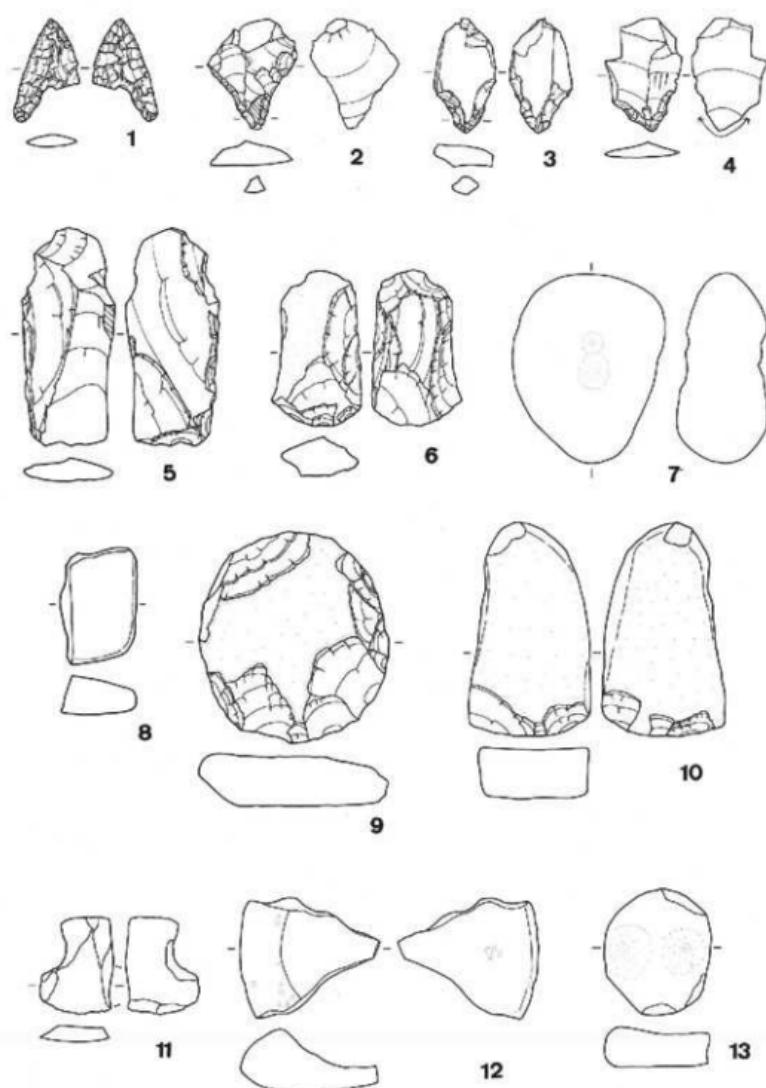
出土遺物は豊富であるが床面からは土器片若干が周囲から出土したのみである。



第6図 7号住居址出土土器 (1) (1/4)



第7図 7号住居址出土土器 [1/4, 1/3, 1/6]



第8図 7号住居址出土石器 [2/3, 1/3, 1/6]

0 10cm 0 20cm

土器 1は口径推定21cm、器高約10cmをはかる浅鉢形土器であり、口縁上部に半截竹管による刺突文、口縁下部に指頭状圧痕の加えられた隆帯をめぐらしている。2、3は横帯区画文、梅円区画文が施されるもの。4は口径14cm、器高22cmをはかる、やや小形の深鉢形土器であり横円を基本とする区画文を2帯重層させている。内面を中心にしていねいな器面調整が行なわれているものの、二次焼成によると考えられる器面の荒れが著しい。5はいわゆる抽象文が施される深鉢形土器。器高41cmをはかり、胴下半部を中心として二次焼成を受けている。13は有孔鏝付土器の一部であり、外面鏝部の上面に赤色塗彩の痕跡をとどめている。15、16はそれぞれ器高5cm、同3.5cmをはかるミニチュア土器であり、ともに、外面を中心に研磨が加えられている。

時期、縄文時代、中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群、第3類土器）の中でも古い段階の所産と考えられる。

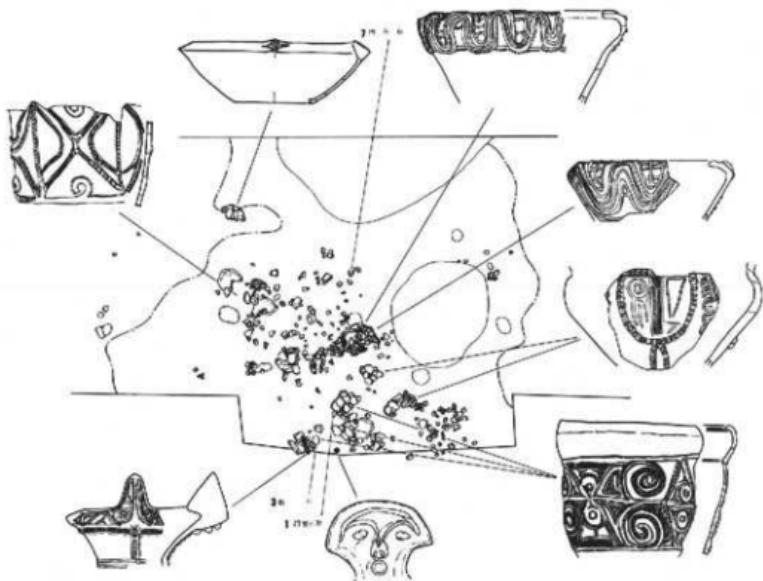
石器 1、石鎌。石質：黒曜石。2～4、ドリル。石質：3点とも黒曜石。3、両面に節理面がある。4、縦長不整形剝片が素材。先端部だけ調整されている。矢印の範囲はバルブ。5・6、打製石斧。短冊形。石質：ともに頁岩。5には自然面あり。7、磨石+凹石。石質：砂岩。表裏ともに浅い凹（約3%）が2つある。8、磨製石製品。石質：砂岩。全体によく磨かれている。板状の磨石かもしれないが、破片なので詳細は不明。9・10、礫器。石質：ともに砂岩。9は裏面にも周辺部全体に表面と同様の調整が加えられている。自然面あり。10は自然の角礫を素材とし、幅広の方に刃がある。自然面あり。11、粗粒石匙。石質：ホルンフェルス。正面圓右側は破損。器面の風化著しく剝離状態の詳細な観察不可能。12・13、石皿。石質：12は安山岩。13は砂岩。12には浅い凹（約3%）が表裏にある。13は、2ヶ所浅く窪んでいる。図示したもの以外に、以下の石器が出土している。打製石斧2点（短冊形、石質：頁岩1砂岩1）、礫器1点（石質：凝灰岩）、磨製石斧1点（定角、石質：凝灰岩）、石鎌2点（石質：黒曜石）、石核2点（石質：黒曜石）、使用痕ある剝片1点（石質：黒曜石）、剝片類74点（石質：黒曜石64、ホルンフェルス4、石英1、水晶1）。

8号住居址 （第9～13図、図版2・3）

发掘区中央西寄りの12・13・P区に位置する。東10mに7号住居址が西10mに3号～10号土塙が存在する。上部が全く削平され壁は存在しない。そのため落ち込みを確認しえず当初は土器溜りとして認識していたが、精査時に床面、及び炉址を確認し住居址として認定したのである。

耕作による削平以前に、12号土塙、2号土塙の両者に切られており、床面の一部を確認したのみである。

削平が激しく、形状、規模等は明らかにしえなかったが炉の位置から推定すると径6～7m程の住居址と思われる。



第9図 8号住居址遺物出土状態図

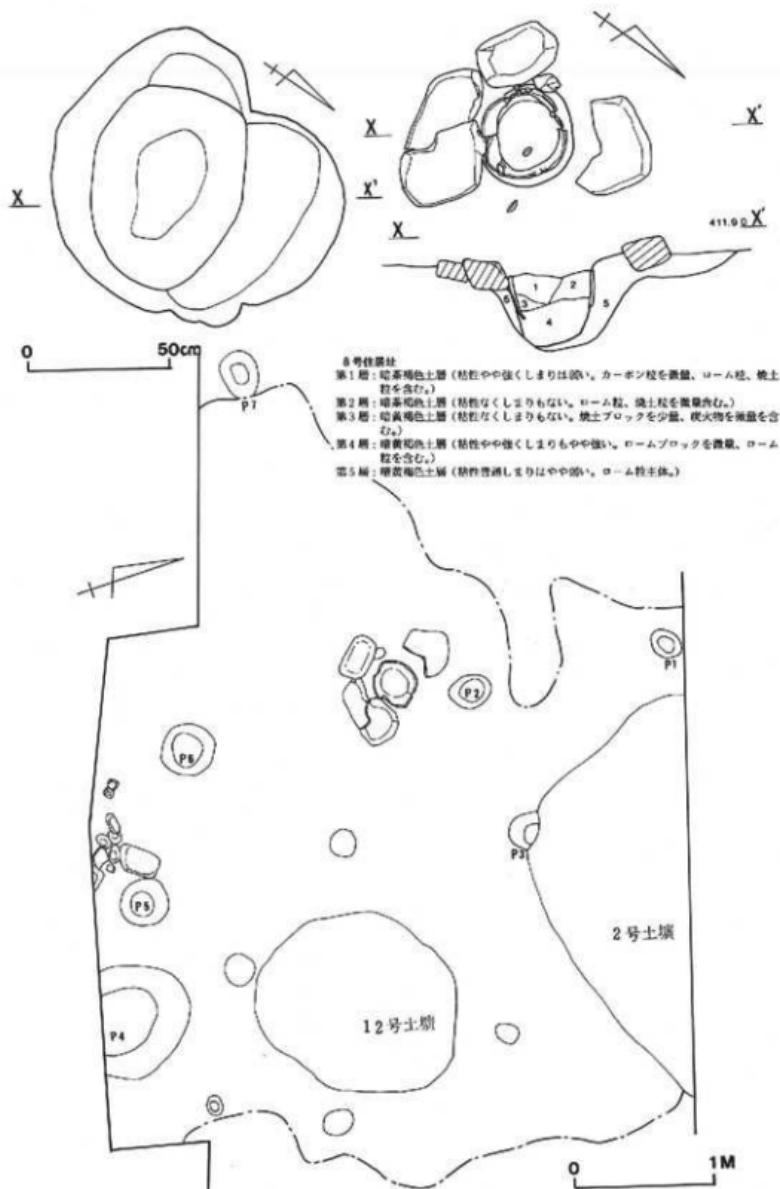
掘り込みはローム層上面で止まっている。本遺跡においては、縄文時代に属する他住居址（7・9号住居址）がローム層中まで掘り込んでいるのに比し、差異を持つものである。

床面は軟弱で、比較的平坦である。

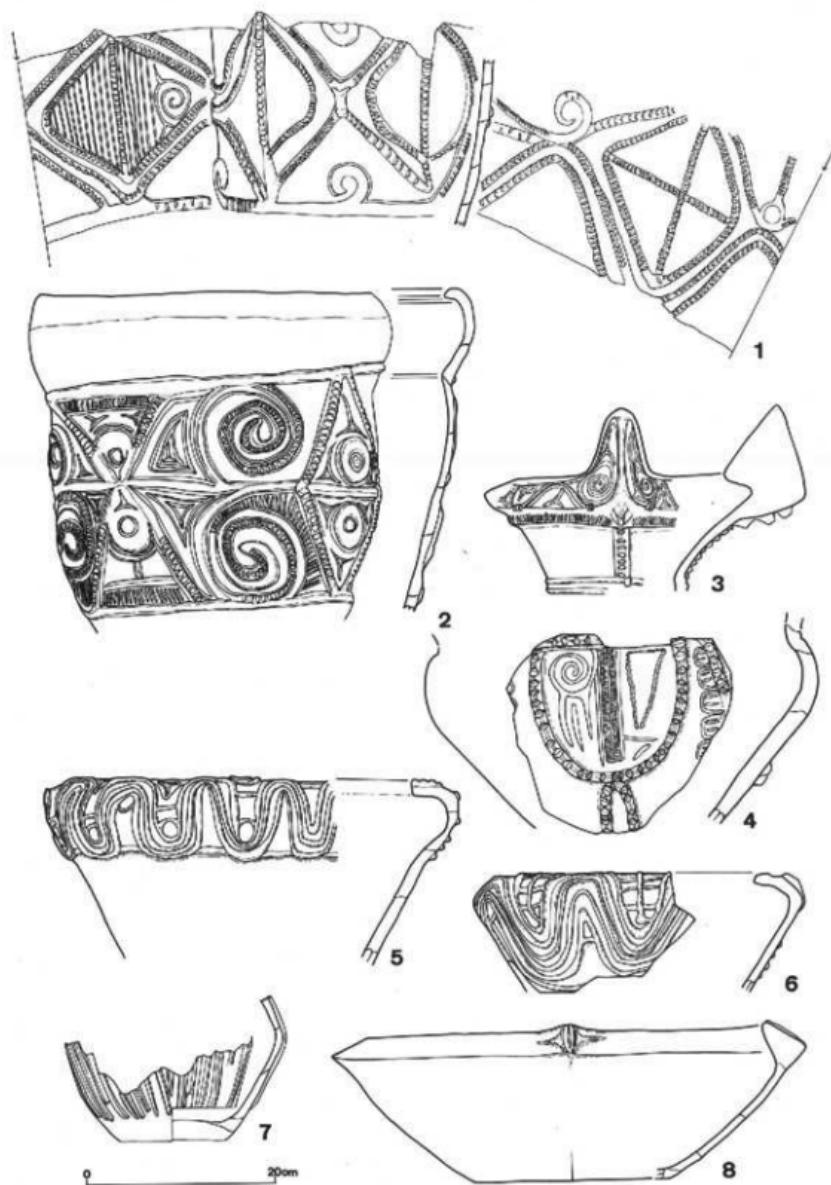
ピットは7ヶ所検出された。深さはそれぞれ11cm、8cm、28cm、34cm、11cm、19cm、55cmを測る。P4は径80cm程で平面不整円形を呈する大型のものであるが、他は径20~30cmである。

炉は石圓埋甕炉で、70×50cmの規模を測る。4個の偏平な角礫をコの字形に配し、中央に土器を埋設する。コの字状に開口した他の一辺に、炉石の抜き取り痕と考えられる浅い凹みがみとめられたことから、本来は四辺を囲まれた石圓埋甕炉として機能していたものと思われる。埋設土器は口径30cm、現在高22cmを測り、深鉢形土器の胴部である。覆土は4層に分けられ焼土ブロックが多量認められる。掘り方は不整形を呈し 100×100cmを測る。中央部は楕円形を呈して一段深く掘り込まれ、掘り込み部は緩らかに立ち上がり、北・西部はテラス状をなしている。土器は掘り方底面よりやや浮いた状態で検出され、第5層（黄褐色土）によって埋設されている。

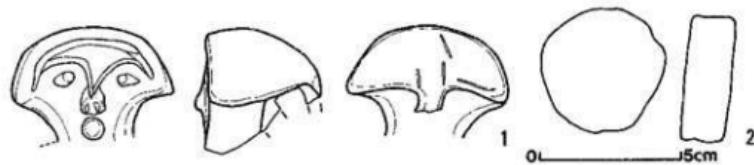
出土遺物は比較的小ないが、炉南側に集中している。



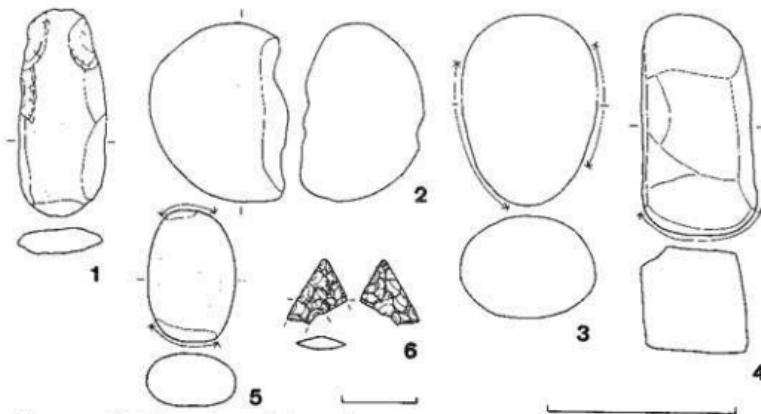
第10図 8号住居址及び炉址 [1/40, 1/20]



第11図 8号住居址出土土器 [1/3]



第12図 8号住居址出土土製品〔1/2〕



第13図 8号住居址出土石器〔1/3, 1/2〕

土器 1は炉体土器であり、口縁部及び底部を欠損する。刻み目のある細い隆帯によって、「タスキ掛け」状の文様を構成している。2は口径35cmを測る大形の深鉢形土器であり、現在高34cmを測る。内湾する口縁部を無文帶とし、胴部には肉彫り風の偏平な隆起帯などにより、渦巻状、三角形状の文様が描かれている。3は口喰状の大形突起のつく口縁部破片。5・6は大きく外反して開き、上部で強く内湾する口縁部破片である。口縁上部に粘土紐貼り付けによる「重弧」状の文様が施される。7は5の刷下半部である可能性が高い。8は「玉胞き三爻文」風の文様が施される浅鉢形土器。口径推定43cmを測る。

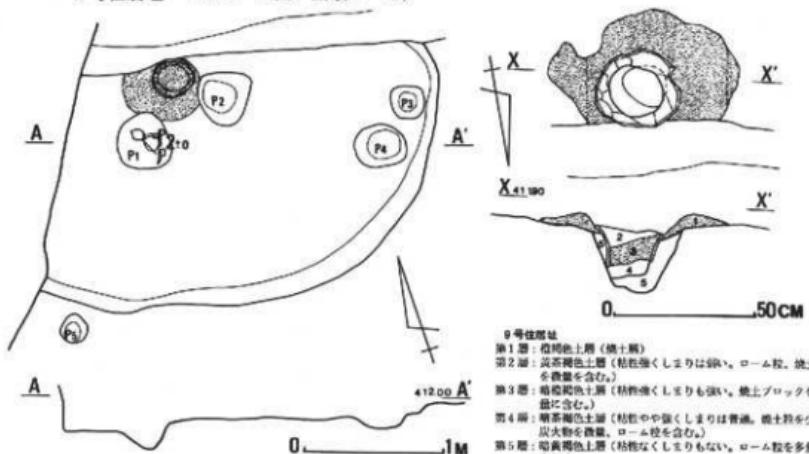
土製品 1は土偶頭部、床面より出土している。覆土中より土製円板2点が出土している。2は径4.3cm程を測り、周囲は打削調整されている。

時期 縄文時代中期中葉、井戸尻式期（第Ⅲ群第4類上器）の中でも新しい時期の所産であろう。

石器 1、打製石斧。短柄形。石質：ホルンフェルス。器面全体の風化が著しいので、剥離状態の詳細な観察は不可能。2、凹石。石質：凝灰岩。裏面の凹は、礫自体の自然の凹。現存

部には、敲石、磨石との併用なし。3、磨石+敲石。石質：安山岩。全体によく磨耗している。実測図の点線内、及び、矢印の範囲には敲打痕がある。裏面（表面の点線の真裏）にも敲打痕がある。4、敲石。石質：凝灰岩。矢印の範囲に敲打痕がある。自然の角礫を利用している。5、磨石+敲石。石質：砂岩。全体によく磨耗している。矢印の範囲に敲打痕がある。6、石鎌。石質：黒曜石。脚部欠損。図示したもの以外に、打製石斧1点（短骨形・石質：頁岩）、石鎌2点（石質：黒曜石）、磨石+敲石2点（石質：安山岩1、ホルンフェルス1）、が出土している。

9号住居址 (第14~15図、図版2・3)



第14図 9号住居址及び炉址 [1/40, 1/20]

遺構 発掘区西半部の4・5-K区に位置する。南に16号土塁が、北に13号土塁（埋蔵）が隣接する。西半部が発掘区域外となり、北半を16号溝によって切られるため住居址全体の約1/4強しか発掘しえなかった。形状は円形～楕円形平面を呈し、規模は3～4m程を測るものと思われる。掘り込みはローム層中まで達するが上部の削平が激しく、壁高は現長で5～10cmを有するにすぎない。

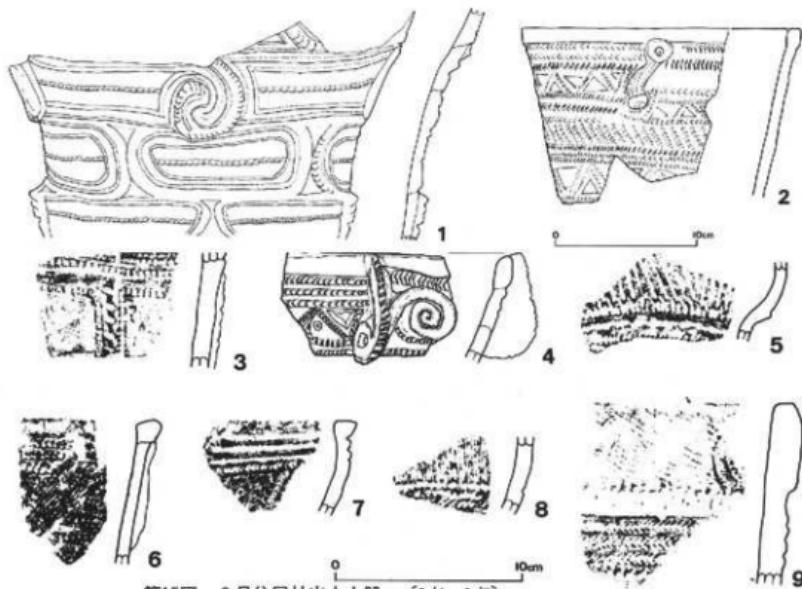
床面は軟弱でなだらかな凹凸を有する。

ピットは5ヶ所検出された。深さはそれぞれ、20cm、15cm、13cm、7cm、20cmを測る。柱穴の特定はしえなかったが、P1、P2は炉脇、P3、P4は東壁際、P5は南壁外に設けられる。

炉は住居址ほぼ中央に位置し、北端部を16号溝に切られる。径30cm程の埋蔵炉で周囲には焼土が盛り上がって遺存している。埋設土器は口径30cm、現存高18cmを測り胴部下半を欠損する。

9号住居址
第1層：植林地土層（焼土層）
第2層：黄褐色地土層（粘性強くしまりは弱い。ローム粒、燒土粒を含む。）
第3層：植林地土層（粘性強くしまりは強い。燒土ブロックを多量に含む。）
第4層：植林地土層（粘性やや強くしまりは普通。燒土粒を少量、从大骨を含む。ローム粒を含む。）
第5層：暗黃褐色土層（粘性なくしまりもない。ローム粒を多量に含む。）

炉内覆土は3層に分けられる。炉掘り方は径35cmの円形を呈し、20cm程を測り、断面は深鉢状を呈している。土器は掘り方中位に据えられた状態で検出され、第5層（暗黄褐色土）によつて埋設されたものであろう。出土遺物は少なく、図示したのも僅かである。1は炉内埋設土器、2は炉脇P1覆土内、3は南東部覆土から出土している。



第15図 9号住居址出土土器 [1/4, 1/3]

土器 1はが体土器であり、口縁部及び底部を欠損する。重層する楕円区画文を基本とし、三角押文を多用している。2は口径推定20cmを測るやや小形の深鉢形土器であり、三角押文、三角形状の挟り文などにより模帶する文様が施される。3は角押文を特徴とする胸部破片。9は三角押文とキャタピラ文が併用される口縁部破片である。

時期 繩文時代中期前半、新道式期（第Ⅲ群第2類）の所産である。

b) 土 坡

3・4号土坡（第16図 図版4）

発掘区中央西寄り、11-P区に位置する。平面確認時においては長大な楕円形土坡と考えたが、調査の進展につれ、二基の土坡であることが判明した。

二基のうち西側に位置するのが4号土坡で3号土坡を切って構築されている。

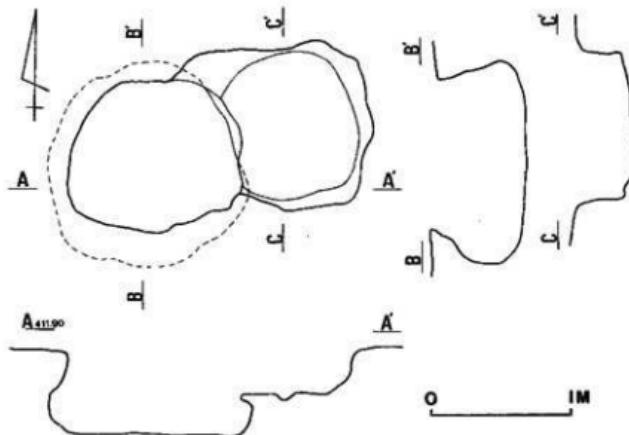
3号土塙 平面形はほぼ楕円形を呈したものと考えられ、規模は径1m程となろう。深さは35cmを測り、塙底は平坦で、断面形は鍋底状を呈する。

遺物は覆土中より縄文時代中期に属する小破片が出土している。

4号土塙 平面形はほぼ円形を呈し、規模は確認面で径120cm、底部で140cmを測る。深さは55~60cmを測り、底面は中央が僅かに低い凹レンズ状を呈する。断面は所謂袋状を呈する土塙である。

遺物は覆土中より縄文時代中期に属する小破片が出土している。

両者共、ローム面で確認されたが本米の掘り込み面は現状よりかなり高かったものであろう。



第16図 3号・4号土塙 [1/40]

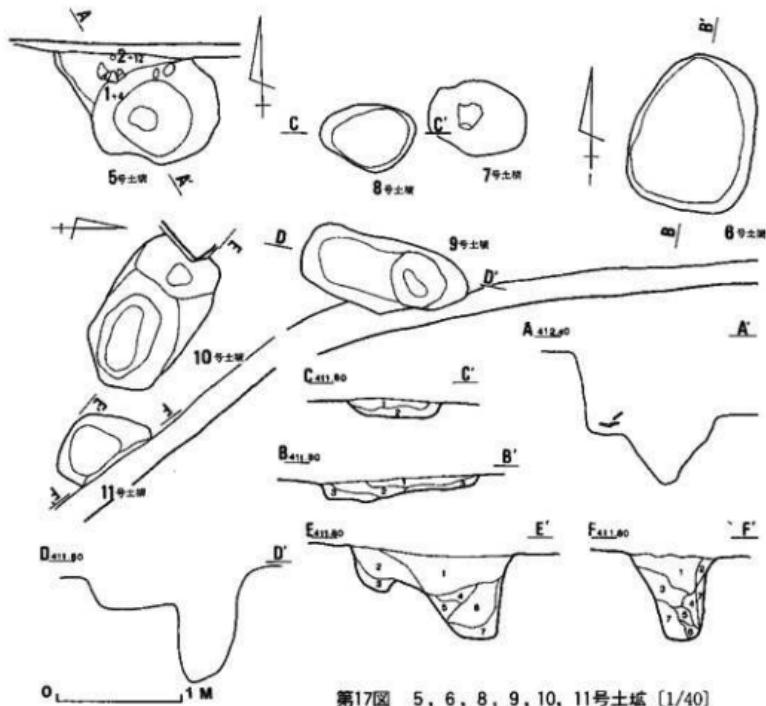
5号土塙 (第17図)

発掘区西部の、10-P区に位置する。北半部が発掘区域外となり、南半部しか確認しえない。その為全体の形状、規模は明らかにしえないが、現状では110×160cmの規模で、ほぼ半円形を呈する。深さは17cmを有するが南端は円形状に1段深く掘り込まれている。土塙底面からの深さは43cmを測る。

縄文時代中期に属する土器5-1が底部より3cm程浮いて、また打斧5-2が、覆土中より出土している。

6号土塙 (第17図)

発掘区西部、10-P区に位置する。ローム層上面で確認したものの、楕円形平面を呈し、120



第17図 5, 6, 8, 9, 10, 11号土壌 [1/40]

6号土壌

第1段：発掘区の上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。ローム層を手前に、根系層を上に起す少な、近地面の根系層を含む。

第2段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を10cmと算定する。

第3段：根系層下部（断面幅くじょうはくさく）を示す。ローム層を手前に、根系層を含む。

7号土壌

第1段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第2段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第3段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第4段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第5段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第6段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第7段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第8段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第9段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第10段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

第11段：根系層上部（断面幅くじょうはくさく）を示す。根系層を手前に、根系層を含む。

7号土壌

× 100cmの規模を測る。深さは18cmを有し、覆土は3層に分かれられる。底面は比較的平坦で、断面タライ状を呈する。

8号土壌 (第17図)

発掘区西部、9-P区に位置する。ローム層上面で確認された平面形は橢円形を呈し、規模は75×50cmを測る。深さは8cm程の浅いもので、断面タライ状を呈し、覆土は2層に分かれる。遺物は出土していない。

9号土壌 (第17図)

発掘区西部、9-P区に位置する。ローム層上面で確認されたが、南東隅の一部が発掘区域外となる。平面形は長円形を呈し、規模は130×60cmを測る。深さは20cmを有し、底面は平坦である。

であるが東端は円形に一段深く掘り込まれ拡底からは60cmの深さを測る。遺物は出土していない。

10号土塙 (第17図)

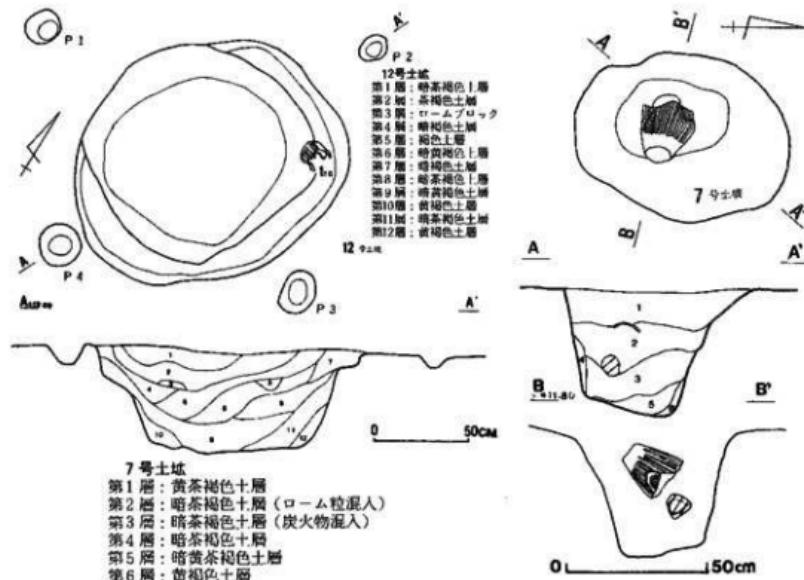
発掘区西部、8-0区に位置する。ローム層上面で確認され、平面形は長円形を呈し、規模は130×75cmを測る。深さは60cmを有し覆土は7層に分けられる。南半部が一段深く掘り込まれるが、北半も円形に掘りこまれ2連ピット状を呈している。遺物は出土していない。

11号土塙 (第17図)

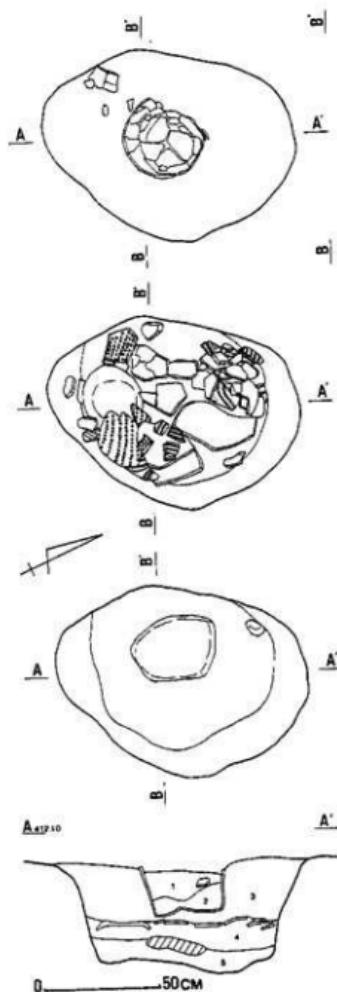
発掘区西部、8-0区に位置する。東端の一部が発掘区域外となる。ローム層上面で確認され、平面形は楕円形を呈し、規模は65×55cmを測る。深さは70cmを有し、円筒状断面を示す。覆土は7層に分けられる。遺物は出土していない。

7号土塙 (第18図、図版4)

発掘区西半、9-0区に位置する。ローム層上面で確認され、平面形は楕円形で、規模は80×60cmを測る。深さは50cmを有し、覆土は6層に分けられ断面形は円筒状を呈する。覆土中位より縄文時代中期(曾利期)に属する土器が出土している。土器は深鉢形土器の胴部下半で、逆位でやや斜立した状態で認められ10×8cm程の角礫を覆う状態で検出された。



第18図 7号土塙及び12号土塙 [1/20, 1/30]



第19図 13号土塁 (1/20)

12号土塁

(第18図、図版4)

発掘区西部、13-0区に位置する。8号住居址中央部を切る。

平面形は不整円形を呈し、規模は75×70cmを測る。深さは55cmを有し覆土は12層に分けられ、全体にローム粒子の混入が顕著である。塙底は中央が僅かに深い凹レンズ状を呈し、壁は垂直に立つが掘り込み面近くで段部を有し、テラス面をつくる。周囲にはほぼ十文字に亘15~20cmのピットが4ヶ所穿たれる。深さはそれぞれP₁~58cm、P₂~14cm、P₃~19cm、P₄~18cmを測る。

縄文時代中期(晩利期)に属する深鉢型土器の完型品が1点テラス面上から斜位の状態で検出された。

13号土塁

(第19図、図版4)

発掘区西端、5-L区に位置する。

中央に埋甕が埋設された土塙であり確認面はローム面であるが上部は削平を受け、西端部にも擾乱を受けている。

平面形は橢円形を呈し、規模は、110×90cmを測る。深さは50cm程を有し断面形はタライ状を呈するが底面は凹凸を有する。

土塙底部には厚さ5~10cmにわたって黒色土が埋め戻される。土塙中央部の黒色土上面には38×28cmで厚さ5cm程の偏平な礎が敷かれる。角礎上部は再度、黄褐色土に

13号土塁

第1層：暗赤褐色土層（粘性、しまりなし、小粒、ローム粒混入）

第2層：暗赤褐色土層（粘性、しまりなし、灰火物、燒土微量混入）

第3層：土焼縮粘土層

第4層：黄褐色土層（粘性、しまりなし、ローム主体層）

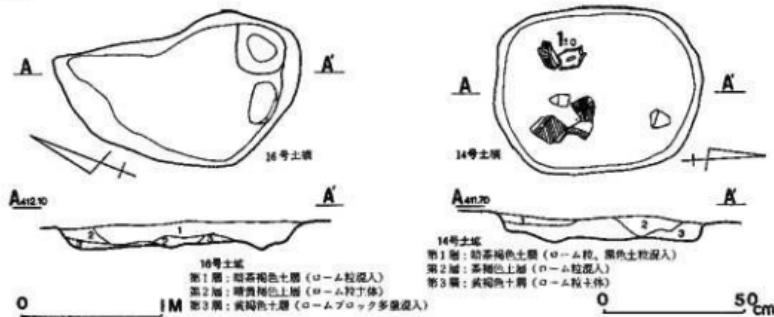
第5層：黒色土（粘性、しまりなし）

よって5cm程埋め戻され、その上面には上器片が上坡一面に敷きつめられる。上器は全て同一個体の深鉢型土器の破片であり、当該土器を破碎した後黄褐色土上面に敷きつめたものと考えられる。しかる後、上坡中央に別個体の深鉢型土器が埋設されている。埋設された土器は、敷きつめられた上器面より更に5cm程浮き正位の状態で検出された。土器は上半部を欠損し胴部径36cm、底径26cmで現存高は30cm程を測るものであり、付近に散乱する土器片等から考へても、更に高さを有していたものであろう。埋甕内覆土は2層に分かれ、炭化物が混入するが特に下層において顕著であり、上層には小甕が認められた。

土坡内埋土（第3層）については調査の不手際により上層観察をなしえなかつたが、埋甕調査時の所見によれば、ローム主体の土層であった。

尚、本址については、本来いわゆる屋外単独埋甕であり土塙とは異なる性格の遺構として扱うべきであろうが、前述した様な土塙の有り様から考へて、ここでは土塙としてとりあげたものである。

遺物は埋設土器と敷きつめられた土器との2個体が認められ、共に深鉢型土器胴部下半である。



第20図 14号土塙及び16号土塙 [1/20・1/40]

14号土塙（第20図）

発掘区の西端、3-I・1区に位置する。

確認面はローム面であるが上部をかなり削平されていると思われ現状では梢円形平面を呈し、規模は75×60cmを測る。深さは5～8cmしか遺存せず底面の凹凸は激しく、壁の立ち上がりは甘い。覆土は3層に分けられ、ローム粒の混入が著しい。

1は台付土器の脚部であり、周辺確認面に散乱していたものと接合する。土塙内での出土状態は、底面に密着しほば正立して認められ、上部の削平等の条件を考えてもほほ原状を示しているものであろう。他の破片も全て底部に密着して検出された。

16号土塙 (第20図、図版4)

発掘区の西端、4—J・K区に位置する。

ローム面で確認されたもので不整椭円形を呈し、規模は 165×100cm を測る。深さは15cm程度を有し断面形は盤状を呈する。覆土は3層に分けられるが、ローム粒の混入が顕著である。

底面南隅には径30cm程度の小ピットが掘り込まれ土塙底面からは11cmの深さを有する。土塙中央部では底面から3～5cm程度浮いて、大小の礫・土器片若干が出土している。



第21図土塙出土土器 [1/2, 1/4]

土塙出土の遺物 (第21~22図、図版7)

土器 5-1は、突起のつく口縁部破片である。口縁上部に一条の沈線がめぐり、以下胴部にはR L 単節縄文を密に施文している。

時期 縄文時代中期中葉、藤内式期 (第III群第3類上器) に帰属されよう。

7-1は深鉢形土器の胴下半部であり、ヘラ状工具による粗い条線文と2本1組の懸垂文が施されている。

時期 縄文時代中期後半、曾利I式期 (第IV群第1類土器) の所産であろう。

12-1は、口径10.5cm、器高13.4cmを測る完形の小形上器である。内溝する口縁部を無文帯として残し、胴部には継ぎの条線を地文として、細かい粘土紐による懸垂文を垂下させている。5cm程にすばまる底部は、上げ底状をなしている。

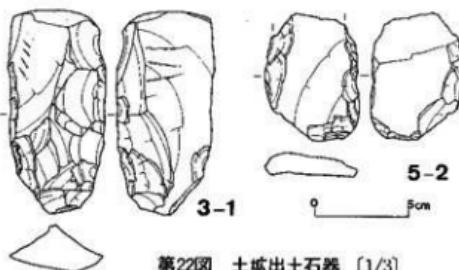
時期 縄文時代中期後半、曾利I~II式期 (第V群第1類土器) の所産であろう。

13-1は現存高50cmを測る大形の深鉢形上器である。胴上半部に刻み目のある隆帯による横帶区画文、下半部にR L 単節縄文をそれぞれ施している。13-2は象抽象文が描かれる深鉢形土器であり、キャタピラ文と三角押文が用いられている。現存高34cmを測る。

時期 縄文時代中期中葉、藤内式期 (第VI群第3類上器) の所産であろう。

14-1は台付土器の脚部であり、円形及びひょうたん形の透しを各一対計4箇所設けている。内面にはタール状をなす炭化物が厚く付着し、黒色を呈する。

時期 縄文時代中期中葉、藤内式期 (第VI群第3類土器) に帰属しよう。



第22図 土塙出土石器 (1/3)

石器 3-1は打製石斧、短削型。石質：ホルンフェルス。基部は自然面。素材は、横長削片。4号土塙から出土している。図示したものの他に、打製石斧の小破片1点 (安山岩)、削片1点 (黒曜石) が出土している。

5-2は打製石斧、短削型 (欠損)。石質：頁岩。5号土塙から出土。

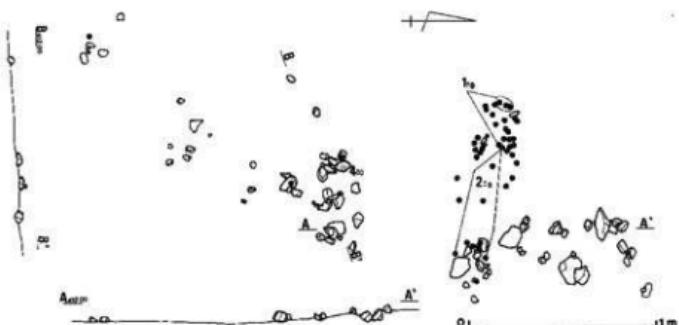
他に、1号土塙から削片類が2点 (黒曜石)、7号土塙から削片 (黒曜石) 1点が出土した。

C) 集石遺構

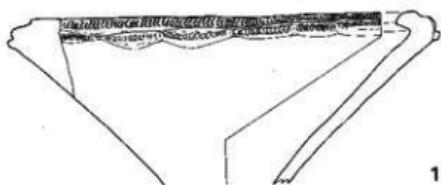
1号集石遺構 (第23~25図)

発掘区南端、3-1区に位置する。

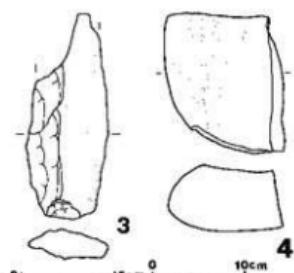
ローム層上面で確認されたが、耕作等による削平の激しいところであり、遺存状態は悪い。



第23図 1号集石遺構 [1/30]



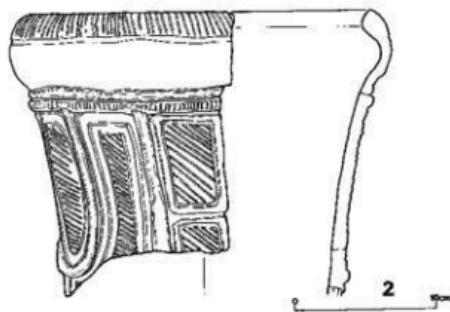
1



3

4

第25図 1号集石遺構出土石器 [1/3]



2

第24図 1号集石遺構出土土器 [1/4]

大小88個の角礫及び43点の土器片が2~3のグループに分かれて認められた。北側の一群は礫の大きさが比較的大きく、かつまとまりが散溝である。南側の一群は小型の礫が集中して認められた。また両者に挟まれた状態で土器片が集中して認められた。

土器 1は三角押文を特徴とする浅鉢型土器であり、口径推定26cmをはかる。2は口径推定24cmをはかる深鉢型土器である。内溝する口縁上部に縦位の短沈線文をめぐらし脛部には縦位構成の区画文を施している。

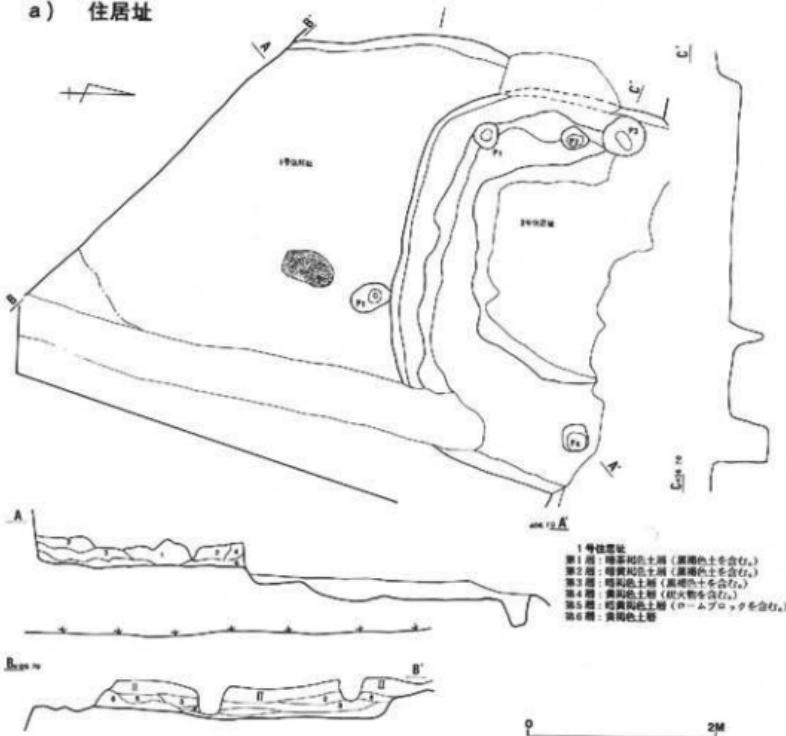
時期 繩文時代中期中葉、藤内式期（第Ⅲ群第3類土器）の所産である可能性が強い。

石器 3、打製石斧、短骨型。石質：ホルンフェルス。器面の風化が著しい。4、石皿。石質：安山岩。表面に凹（深さ約5%）を1つ有す。他に、剝片（黒曜石）が1点出土している。

（百瀬忠幸）

第2節 古墳時代以降の造構

a) 住居址



第26図 1号住居址及び2号住居址掘り方 [1/60]

1号住居址 (第26図)

発掘区最東端、57—B・C、58—C区に位置する。北半部を2号住居址に切られ、また南端部は発掘区域外となり、更に上部をかなり削平されている。北西部部分及び東側は擾乱を受けている。西約8mに3号住居址が存在する。

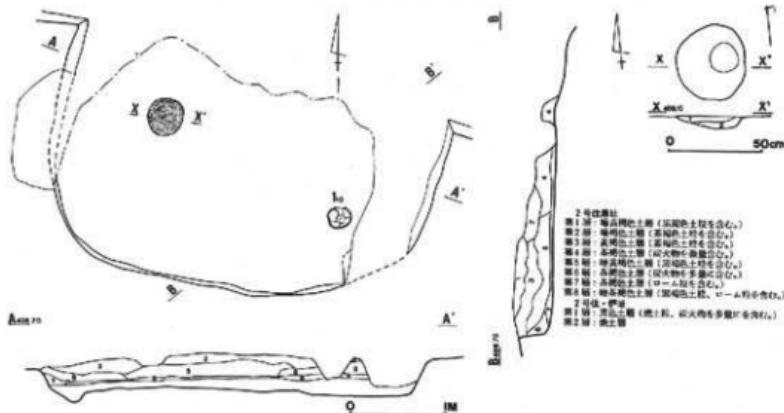
遺存状態は悪く前述した状況であり、平面形、規模、主軸方位等は明確にしえない。

掘り込みはローム層まで達し、壁高は西壁で24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

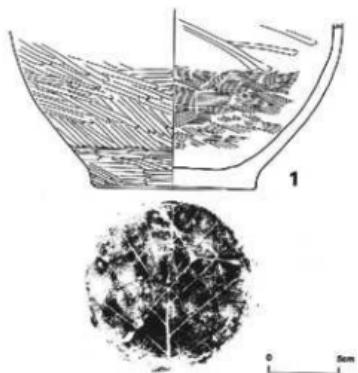
覆土は6層に分けられ自然堆積を示す。

床面の状態は非常に軟弱である。

ピットは1ヶ所検出され深さは約37cmを測る。貯蔵穴、周溝等は検出しえなかった。住居址東寄り床面に焼土溜りが検出され炉址の痕跡と考えられる。規模は1.05×0.6mを測る。掘り方は床下全城に及び底面は凹凸がみられ、床面からの深さは平均28cmである。遺物は少なく、かつ細片化している為図示したものはない。



第27図 2号住居址及び炉址 [1/60 1/30]



第28図 2号住居址出土土器 [1/4]

床面は全体的に堅緻でほぼ平坦である。

ピットは掘り方底面から4ヶ所検出された。P₁が主柱穴と考えられる。深さはP₁-27cm、P₂-23cm、P₃-34cm、P₄-70cmを測る。貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

2号住居址（第26～28図、第1表）

発掘区最東端部、57・58-C区に位置する。南側部分において1号住居址を切り、北側を1号溝によって切られる。東約8mに3号住居址が存在する。

遺存状態はあまり良くなく住居址南半部約1/2が遺存するのみである。平面形態は隅丸長方形を呈すると思われ規模は現状で2.1×4.1mを測るが、長軸は4.5m程にはなろう。

主軸方位はN-15°Eにとる。

掘り込みはローム層に達し、壁高は南壁で約35cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は8層に分けられ、自然堆積を示す。

炉址は住居址西半部に構築され40×37cmのほぼ正円形を呈し、深さは8cmを測る。炉石はなく覆土は2層に分けられる。また炉を取り巻くように東西95cm、南北55cmの範囲で炭化物を含む焼土が存在する。

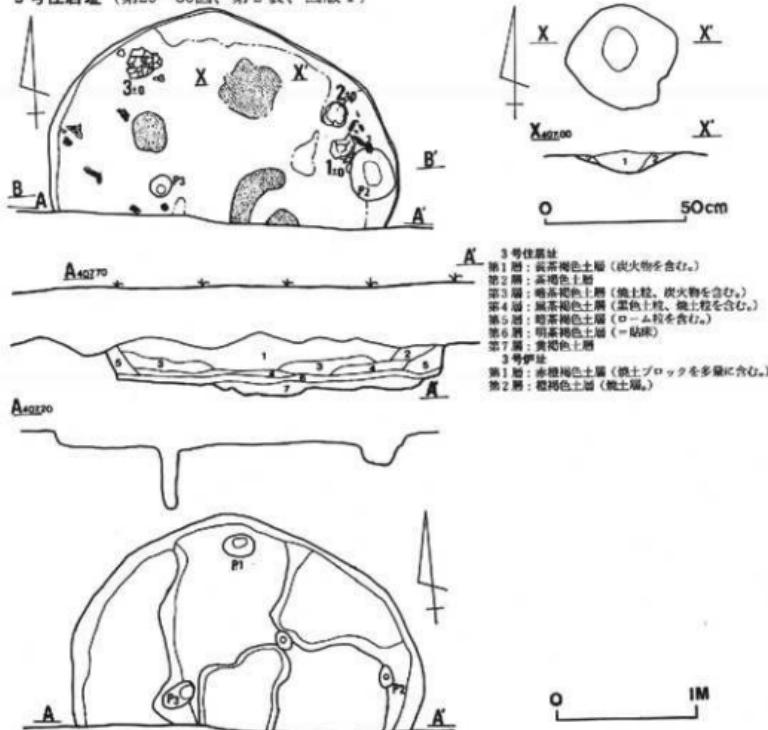
掘り方は床下全面に及び中央が深く周辺が浅く掘り込まれ壁面でわずかに段部を形成する。床面からの深さは3~24cmである。

出土遺物は少なく図示したものも1点である。壺1は東南部床面より出土している。

第1表 2号住居址出土土器観察表

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 壺 | 法量 底部径 11.59 cm 現存率 脱部下半~底部 完存 セイケイ 外面一側部下半 斜め方向のヘラミガキ 底部付近横方向のヘラミガキ 底部簡単なナデ 底面木葉痕 内面一側部下半ナデ 横及び斜め方向のハケ 底面簡単なナデ 胎土 密 燃成 良 色調 暗赤褐色 |
|---|---|---|

3号住居址 (第29~30図、第2表、図版1)



第29図 3号住居址、掘古層及び炉址 [1/20, 1/40]

発掘区東半部54・55-C・D区に位置している。東約8mに1・2号住居址が重複して存在する。南半部が発掘区域外となり、住居址の約1/2を発掘したのみである。

遺存状態は不良で平面形態は円形あるいは梢円形を呈し規模は現状で1.5×2.5mを測るが、復元径は2.5×3m程となる。主軸方位をN-27°-Eにとる。

掘り込みはローム層にまで達し、壁高は東壁で22cm、北壁で6cmを測り緩やかに立ち上がる。覆土は5層に分けられ自然堆積を示す。

床面は軟弱である。また床面には北東壁寄り及び南壁付近を中心として炭化材、焼土が検出されており焼失住居と推測される。

ピットは3ヶ所が検出されP₁、P₂が土柱穴である。P₁-21cm、P₂-10cm、P₃-43cmを測る。

貯蔵穴は検出されない。

周溝は北西部部分から南東部分にかけて断続的に巡っており巾5~10cm、深さは最深で5cmを測る。

炉址は住居址北東部に構築され40×37cmのほぼ円形を呈し、深さ9cmである。覆土は2層に分けられる。

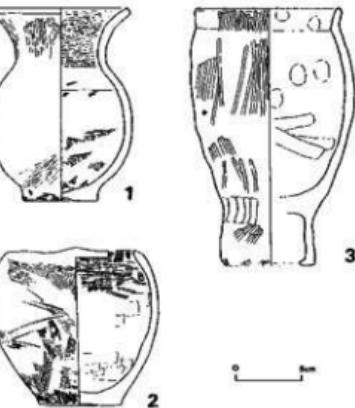
掘り方は床面全体に及び中央が浅く周囲が深く掘り込まれるが壁際は一旦浅く掘り込まれ段部をなす。底面は凹凸がみられるが全体的には平坦である。床面からの深さは5~45cmを測る。

出土遺物は少なく図示したものも僅かである。小型壺1と無頸壺2は北東壁寄り、台付壺3は北西壁際より出土している。

第30図 3号住居址出土土器〔1/4〕

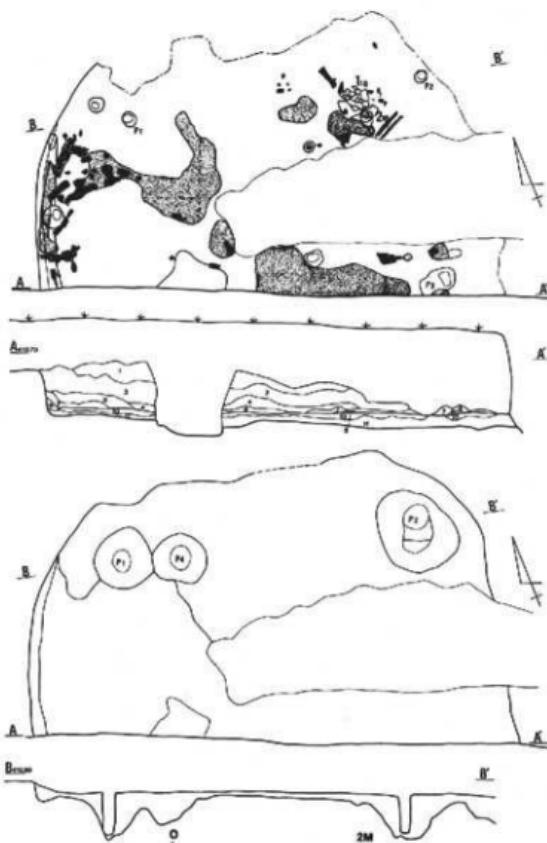
(1)

第2表 3号住居址出土土器観察表



| | |
|---------|--|
| 1 小型壺 | 法量 口縫部径10.32cm 頭部径6.71cm 脚部径10.53cm 底部径5.71cm 器高 14.52cm 現存率 ほぼ完存 せいけい 外面一口唇部ナデ 口縫部～頭部 椅方向のヘラミガキ 制部下半斜め方向のヘラミガキ 底部斜め方向のハケ 底面簡単なナデ 内面一I脚部～頭部横方向のヘラミガキ 脚部上半～中頃横方向のハケ 脚部下半～底面横及び縦方向のハケ 全体的にマツヅが激しい。胎土 密 燃成 良である がやや軟質 色調 赤褐色 |
| | 法量 口縫部径9.44cm 脚部径 12.48cm 底部径 5.19cm 器高 11.73cm 現存率3/4 せいけい 外面一口唇部簡単なナデ II縫部ナデ 脚部上半斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘラミガキ 制部中頃縫及び斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘヤミガキ 脚部下半斜め方向のハケ及び所々に横方向のヘラミガキ 底部付近縫方向を主とした細かいハケ 脚部中頃横方向のヘラミガキの後ナデ 脚部下半横方向のヘラミガキ 底面簡単なナデ 胎土 密 燃成 良 色調 赤褐色 |
| 2 無頸小型壺 | |

| | | |
|---|-----|--|
| 3 | 台付窓 | 法量 口縫部径 10.9 cm 窓部径 12.2 cm 脚部底径 6.7 cm 窓接合部径 7.4 cm 窓高 19.4 cm 現存率 ほぼ完形 セイケイ 外面一口脚部、指頭押えのちナダ。口 縫部縦方向のミガキ。脚部上半、縦方向のミガキ。脚部下半斜位のミガキ。脚部、ハ ケのちミガキ。脚接合部、指押え 内面一上半、指押えのちナダ。下半、ヘラ押え。 胎土 密。焼成 良。良調 暗茶褐色。 |
|---|-----|--|



第31図 4号住居址及び掘り方 [1/60]

- 第1層：黒褐色土層（粘性でくしきりしない）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第2層：赤褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。黒褐色土層。ローム地を含み、コールブロックを少く含む。）
- 第3層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第4層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第5層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第6層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第7層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第8層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第9層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第10層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第11層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第12層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第13層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第14層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第15層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第16層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第17層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第18層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第19層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第20層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第21層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第22層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第23層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第24層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第25層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第26層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第27層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第28層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第29層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第30層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第31層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第32層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第33層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第34層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第35層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第36層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第37層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第38層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第39層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第40層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第41層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第42層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第43層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第44層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第45層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第46層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第47層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第48層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第49層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第50層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第51層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第52層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第53層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第54層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第55層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第56層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第57層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第58層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第59層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）
- 第60層：黒褐色土層（粘性でくしきりしないものや少く）。ローム地。赤褐色土塊を含む。）

4号住居址

(第31~32図、第3表)

発掘区中央部やや東寄り
34・35—II・I区に位置する。
6号溝により北壁を、攪乱によって中央部を切
れている。西約5mに5・6号住居址が重複して存在す
る。南半部が発掘区域外となり住居址の約1/2を検出
したにすぎない。

造存状態は不良で平面形
態は隅丸長方形を呈すると
思われ規模は現状で3×5.
10mを測るが、長軸は5.5
~6m程になるものと考え
られる。主軸方位をN-23°
~Eにとる。

覆土は9層に分けられ自
然堆積の様相を示す。

床面は堅緻で平坦である。
壁際を中心として、ほぼ全
域に炭化材、焼土を検出し、
焼失住居であることを示し
ている。

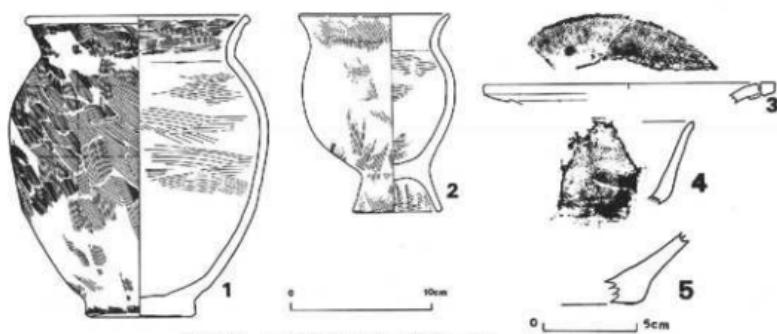
ピットは多数検出された。

P₁、P₂が主柱穴で深さ
はそれぞれ40cm、45cmであ

る。他は住居址内の各所に散在しており比較的大きなP₃は深さ約35cmを測る。P₄は掘り方面で検出され深さ30cmを測る。炉址、周溝共に検出されていない。

掘り方は床下全面に及びながらかな凹凸を有するが、ほぼフラットな状態である。床面からの深さは23~25cmである。

出土遺物は少なく図示したのも僅かである。全体的に住居址東寄りから集中して出土しており、床面からは壺1と小型台付壺2がほぼ完形で出土している。

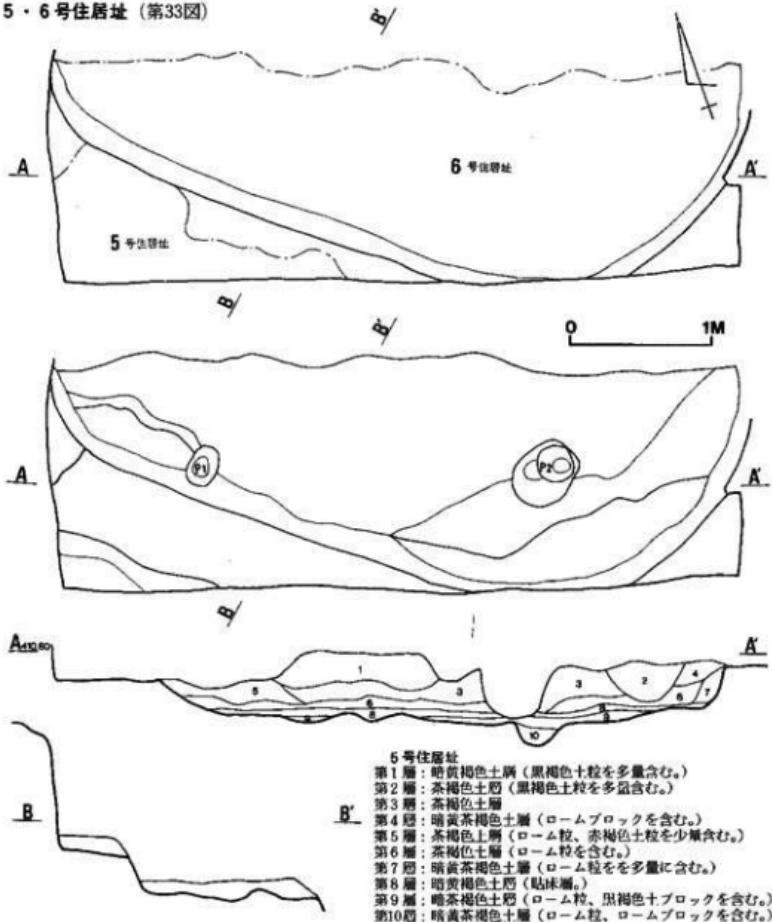


第32図 4号住居址出土土器 [1/3, 1/4]

第3表 4号住居址出土土器観察表

| | | |
|---|-----|---|
| 1 | 壺 | 法量 口縁部径 (15.80) cm 頭部径 (13.58) cm 脚部径 (18.22) cm 底部径 7.74 cm 器高 21.32 cm 現存率 底部は完存 他は1/2 せいけい 外面一口脚部ナデ 口縁部～脚部及び斜め方向のハケ 脚部上半斜め方向のハケ 脚部中頃斜め及び縦方向のハケ 脚部下半斜め及び縦方向のハケ 底部付近縦方向のハケ 底面簡単なハケ 内面一口縁部～脚部横及び斜め方向のハケ 脚部横及び斜め方向の太いハケ 残面簡単なナデ 胎土 密。焼成 良。色調 暗赤褐色。 |
| 2 | 台付壺 | 法量 頭部径 9.43 cm 脚部径 10.84 cm 脚接合部径 4.67 cm 脚部底径 6.24 cm 器高 13.08 cm 現存率 口縁部をわずかに残す。脚部は完存。せいけい 外面一口縁部～脚部 縦方向を主とするハケ 脚部(ヘラケズリ)、マツツしている。脚接合部 指標正直、縦方向のハケ 脚部縦方向を主とするハケ 内面一口縁部～脚部ナデ 脚部上半横及び斜め方向のハケ 脚部中頃～下半横方向のハケ後ナデ 脚部上半ナデ 脚部下半横方向のハケ 胎土 密。焼成 良。色調 暗茶褐色。 |
| 3 | 壺 | 法量 口縁部径 20.6 cm 現存率 口縁部片 1/5 せいけい 外面、ハケのち折り返しナデ。内面細織文。胎土 白砂を含み密。焼成 良。色調 暗赤褐色。 |
| 4 | 壺 | 現存率 口縁片 せいけい 外面、ハケのちナデ。段部、横ハケ。内面、粗いハケ。胎土 白粒砂を含み密。焼成 良。色調 茶褐色。 |
| 5 | 壺 | 現存率 底部片 せいけい 外面、ミガキのちナデ。内面、ハケ。胎土 白粒砂を含み密。焼成 良。色調 赤褐色。 |

5・6号住居址 (第33図)



第33図 5・6号住居址及び掘り方 [1/40]

発掘区中央部31・32-I・J区に位置する。東5mに4号住居址が存在する。6号住居址はほとんどが6号溝によって切られており、南端部を検出したのみである。また5号住居址は6号住居址南東隅確認の為に発掘区を拡張した際に検出されたもので、北半部を6号住居址に切られ、南半部は発掘区域外となる為、そのごく僅かを確認したにすぎない。

遺存状態は、両住居共に悪い。5号住居址は床面の一部を確認したのみであるが、床面は堅緻な貼床である。掘り込みはローム面に達していた。

ピット、周溝、炉址は一切検出されていない。

掘り方は中央方向が深く、その周辺が浅く掘り込まれると考えられる。

6号住居址は南壁沿い一部を残すのみである。平面形態は隅丸長方形を呈すると考えられ規模は現状で 4.8×1.6 mを測る。主軸方位は南壁からの推定であるがN-29°-EあるいはN-61°-Wにとるものと思われる。

掘り込みはローム層にまで達し壁高は南壁で30cm、東壁が10cmを測り緩やかに立ち上がる。

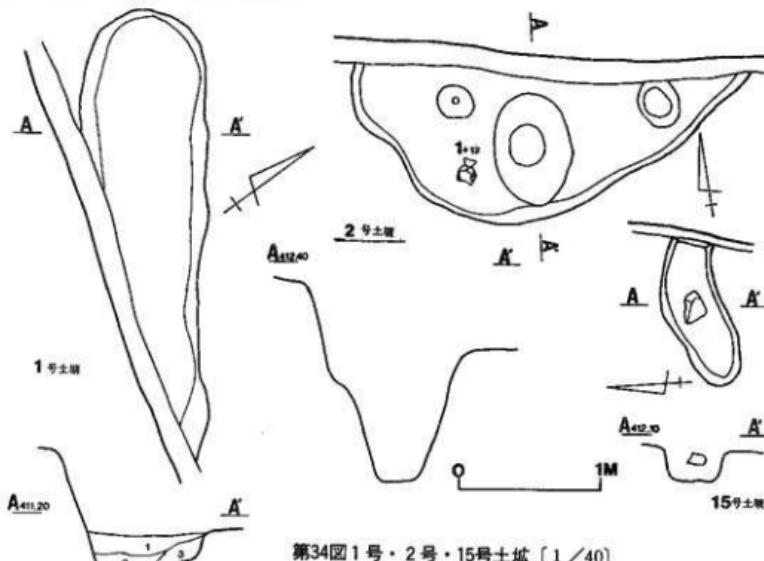
覆土は8層に分けられ自然堆積を示す。床面は軟弱な貼床である。

ピットは2ヶ所で検出されている。P₂は南東コーナーにあり主柱穴と思われ深さ36cmを測る。

貯蔵穴は認められない。また周溝、炉址についても検出されない。

掘り方は周辺が浅く中央が一段深く掘り込まれる。底面は凹凸を有し、床面からの深さは10cm前後で埋土は2層に分けられる。出土遺物は両住居址共に皆無である。

b 土塙 (第34~35図、第4表)



第34図 1号・2号・15号土塙 [1/40]

第1層：暗茶褐色土層（黒褐色土粒を微量含む。）

第2層：黒茶褐色土層（ローム粒を微量、黒褐色土粒を含む。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒を少量、カーボン粒、赤褐色土粒を微量、黒褐色土粒を含む。）

1号土壙(第34図)

発掘区中央、24-L区に位置する。南半部が発掘区域外となり北半部を確認したのみである。形状は長円形を呈すると考えられ、規模は現長 3×0.9 cmを測る。掘り込みはローム層中まで達し、深さは25cmで鍋底状断面を示す。覆土は3層に分けられ黒褐色土粒が多量混入する。

遺物は台付甕脚部が1点覆土下部より出土しているが小片の為、図示しえなかった。

構築時期は不明であるが、出土遺物・覆土に混入する黒褐色土が古墳時代初頭の住居址覆土に混入するものと同一であること等から古墳時代初頭の所産としておきたい。

2号土壙(第34～35図 第4表)

発掘区中央西寄りの、18-P区に位置する。8分住居址を切って構築される。

北半部は発掘区域外となり、南半部を確認したのみである。形状は梢円形あるいは隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は現状で 2.8×1.0 mを測る。深さは40cm程で断面は鍋底状を呈する。

底部には3ヶ所ピットが設けられ中央のものは 80×50 cmの梢円形平面を呈し深さは土壙底面より66cmを測る。

西壁寄り、覆土中位からほぼ完形の台付甕1が出土している。横位であるが、口縁部を僅かに下に向かた状態で検出された。

15号土壙(第34図)

発掘区南端、5-K区に位置する。本壙は16号溝確認中にその上面から検出されたものでII層中から16号溝覆土内に構築されている。

東端が発掘区域外となっているが、ほぼ長梢円形を呈し、規模は、 110×40 cmを測る。深さは30cm程を測り、比較的平坦な底面を持つ。土壙上面から周辺にかけて大小の礫が認められたが、全て覆土上層からの出土である。

時代を判定する資料は得られなかったが、溝状造構埋没後の所産であり、本遺跡にあっても比較的新しい時期のものであろう。

第35図2号土壙出土土器[1/4] 第4表、2号土壙出土土器観察表

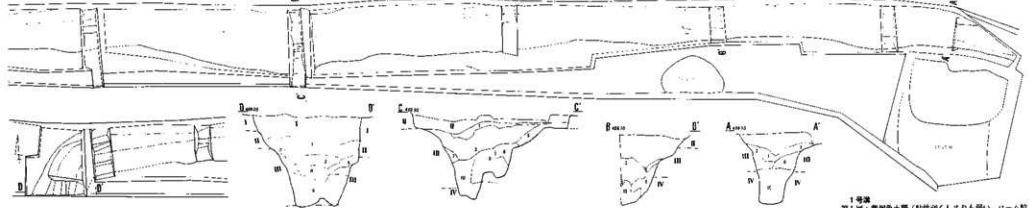
| | |
|-------|--|
| 1 台付甕 | 法量 口縁部径 11.66 cm 頸部径 10.24 cm 最大径 12.68 cm 脚接合部径 4.39cm 脚部底径 9.90 cm 崩高 16.98 cm 視存率 ほぼ完形 せいけい 外面一帯脚部横 方向のハケ、ナデ 口縁部～頸部縁及び斜め方向のハケ 頸部上半横及び斜め方向の ハケ 脚部下半指標正直 脚接合部ナデわずかに腹方向のハケ 脚上部わずかに斜方 向のハケ 脚下部斜方向のハケ 内面一口縁部～頸部ナデ 脚部上半横方向のハケ 脚部下半横方向のナデ 脚部ナデ 脱土 密 烧成 良 色調 黑茶褐色。 |
|-------|--|

c 溝状造構(第36～38図、図版3)

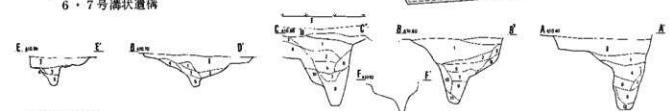
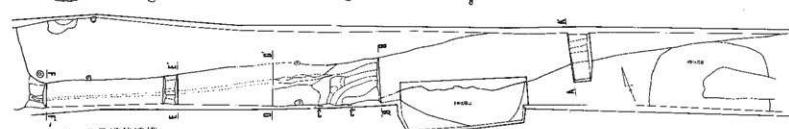
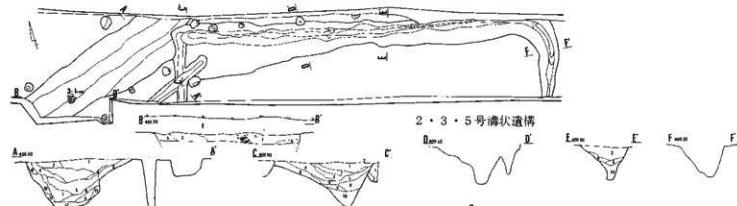
1号溝 58-D区から西走、46-E区で南へ曲る。巾は確認面2.5m、底面0.6～1m、深さ1.3～1.5m。断面形は漏斗状。覆土は10層、最下層(第9・10層)は人為的堆積か。

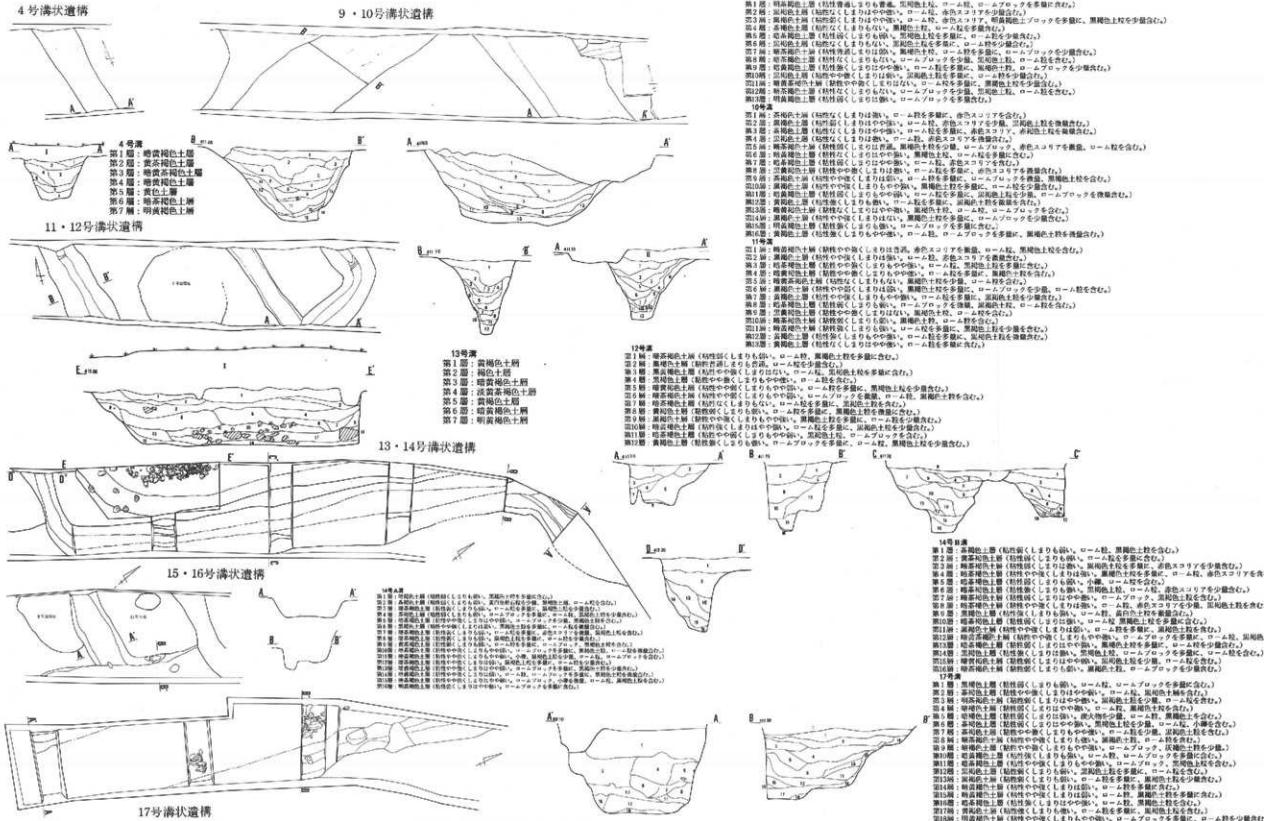
2号溝 39-G区から東走、43-F区で南へ曲る。西端で3号溝を切る。巾1.5m、深さ1m

1号溝状造構



■黒板土器：「黒板」（しろいた）も「黒板」、ヨーロッパでは「白板（ホワイトボード）」。黒板土器は「黒板合戦」。
■葉巻土器：「葉巻（かのまき）」も「葉巻（カノマキ）」。葉巻土器は「葉巻（カノマキ）」を含む。
■花瓶土器：「花瓶（はなびん）」も「花瓶（ハナビン）」。花瓶土器は「花瓶（ハナビン）」を含む。
■花壇土器：「花壇（はなわん）」も「花壇（ハナワーン）」。花壇土器は「花壇（ハナワーン）」を含む。
■花園土器：「花園（はなぞの）」も「花園（ハナゾノ）」。花園土器は「花園（ハナゾノ）」を含む。
■花束土器：「花束（はなつむ）」も「花束（ハナツム）」。花束土器は「花束（ハナツム）」を含む。
■花瓶花土器：「花瓶花（はなびんばな）」も「花瓶花（ハナビンバナ）」。花瓶花土器は「花瓶花（ハナビンバナ）」を含む。
■花瓶花束土器：「花瓶花束（はなびんばく）」も「花瓶花束（ハナビンバク）」。花瓶花束土器は「花瓶花束（ハナビンバク）」を含む。
■花瓶花束花土器：「花瓶花束花（はなびんばくばな）」も「花瓶花束花（ハナビンバクバナ）」。花瓶花束花土器は「花瓶花束花（ハナビンバクバナ）」を含む。





第37圖 滝状遺構(2) [1 / 160]

断面形は漏斗状。覆土は10層、ロームの混入が顕著。

3号溝 38・39-G区。巾2.1m、深さ1m。溝両側に小ピットを持つ。覆土は12層、黒褐色土が主体。第1層下部から大型壺3-1が出土。破碎した後遺棄した可能性が高い。

4号溝 37-G・H区。巾、深さ共90cm。断面形逆台形状。覆土7層、黒褐色土が主体。

5号溝 39-E区。北端で2号溝と接する。巾、深さ共40cm。

6号溝 35-I区から西走、31-J区で南に曲る。巾1.3~1.8m、深さ1.3m。断面形は深鉢状。覆土は12層、ローム粒の混入が顕著。

7号溝 28-K区~31-J区。巾は100cm、深さ50cm、中央が漏斗状に一段深く掘りこまれる。覆土は5層、ローム粒の混入が顕著。西端で8号溝、東端で6号溝に接する。

8号溝 27-K区で西へ折れ、西走した後23-M区で再び北に折れる。2~3本の溝が平行して走り一括して8号溝とする。西側の溝は巾150cm、深さ160cm、断面深鉢状、覆土は12層ロームの混入が顕著。中央の溝は巾80cm、深さ80cm、断面深鉢状、西側の溝と同一のものか。東側のものは巾150cm、深さ80cm、底部は二条に分かれ断面W形。7号溝と接する。東側の溝は西側の溝に切られる。

9・10号溝 22-M区~18-N区。巾は共に3.2~3.5m、深さ1.5m。断面逆台形、9号溝は東側が、10号溝は西側がひらき気味に立つ。覆土は16~20層、黒褐色土が縞状に堆積。

11・12号溝 11号溝は18-N区。12号溝は15-O区。共に巾1.3~1.5m、深さ1.5~1.2m。断面形は深鉢状、11号溝は西側が12号溝は東側が急角度に立つ。覆土は12~13層、黒褐色土と暗黄褐色土が互層をなす。

13号溝 9・10-P区。東端は北へ曲がる。巾1m、深さ60cm。

14号溝 8-P区から南走。5-L区で西へ曲がる。2本の溝が平行して走り、東側を14A溝、西側を14B溝とした。14A溝は巾2.2m、深さ1.3m。断面形は逆台形で底部に段部を有する。覆土は16層、ローム粒の混入が顕著。14B溝は巾2m、深さ1.0~1.2m。断面形は逆台形、溝底面は平坦。覆土は16層、最下層上面に大小の礫が集積。

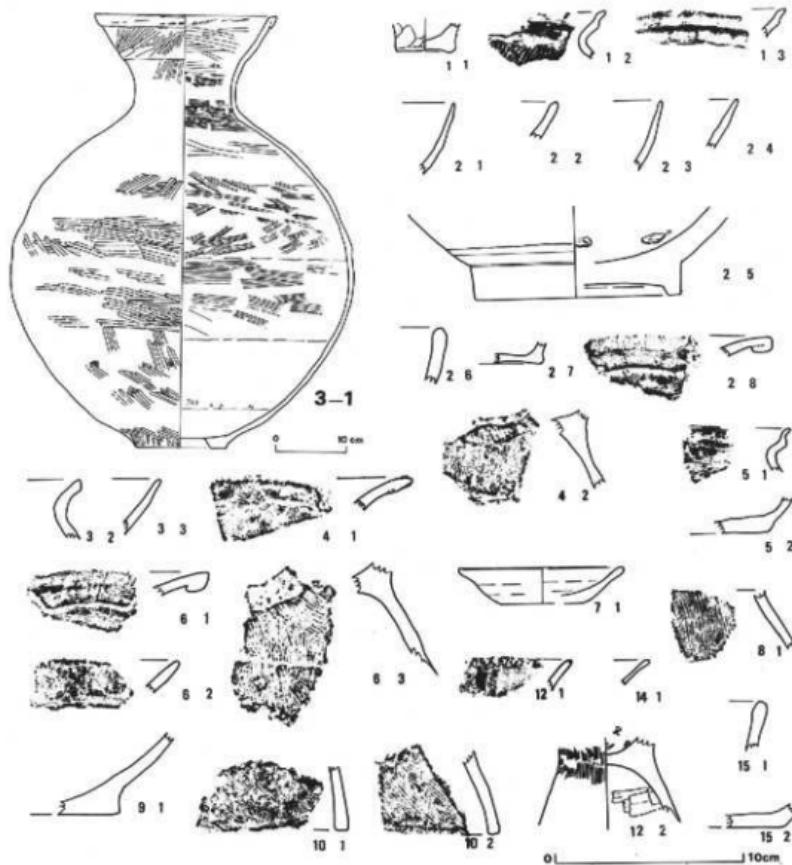
15・16号溝 5-K、6-L区で切り合って存在する。15号溝は巾1.5m、深さ23cm。16号溝は巾1.5m、深さ43cm。断面形は共に皿状。

17号溝 3-I・J区~1-F区まで南~北に走る。確認面巾不明、底部巾は2.5m、深さ1.3m。断面形は逆台形、底面は平坦で一部段部を有する。覆土は19層、中位に大小の礫が流入。

出土遺物(第38図、図版5)

1号溝 1はミニチュア土器底部、底径3.2cm、外面に指頭圧痕。胎土密。焼成良好、色調茶褐色。2、3はS字状口縁盤口縁片、胎土密、焼成良好、色調茶褐色、外面斜のハケ、口縁部は内外面共に強いナダ。

2号溝 1~3は天目茶碗片。1~2はやや焼成が甘い。1は黒色釉、2は鉄釉、3は黄



第38図 溝状遺構出土土器 [1/4 1/3]

緑色釉。1～2は瀬戸系。3が美濃系のもの。4は灰白色釉が施される志野系の茶碗片。5は瀬戸美濃系の近世陶器、片口鉢底部。底径は11cm、高台は1.9cmでケズリ出し。焼成堅緻、黄緑色釉。6～7は土師質土器共に盤一部。7は内外面共に黒色。8は壺口縁、内外面共ナデ胎土密。色調暗茶褐色。

3号溝 1は壺、口径25.6cm、頸部径14.2cm、肩部径48.2cm、底径12.8cm、高さ63cm、胴部は球状に張る。頸部は内湾気味に立ち、僅かに段部を有する。口縁は折り返される。底部は焼成後穿孔、外面はハケのちミガキ、口縁はナデ、内面はハケ、頸部は粗いミガキ。色調赤褐色。

焼成は甘い。2は小型壺口縁片。内外面共にミガキ。色調赤褐色。焼成良好。3は高环片。内外面共にミガキ、口縁部はナデ。色調赤褐色。焼成良好。

4号溝 1壺口縁片。外面ハケのちナデ、内面ミガキ。胎土、焼成良好。色調暗赤褐色。

5号溝 1S字状口縁壺口縁。外面斜方向のち横方向のハケ、口唇部内外面強いヨコナデ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。2壺底部。外面ミガキ。色調赤褐色。

6号溝 1壺。外面ハケのちナデ、内面ハケのちミガキ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。

2小型壺。外面ミガキのちナデ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。3台付壺脚部。内、外面ハケ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

7号溝 1カワラケ1/4個体。巻き上げ後ロクロ成形、内外面共にナデ、底部は時計方向の回転糸切り。胎土、焼成良好。色調明茶褐色。

8号溝 1壺脚部。外面粗いハケ。内面細いハケ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。

9号溝 1壺底部。外面ミガキ、底部はハケのちナデ、内面ハケ。胎土、焼成良好。色調赤褐色。

10号溝 1、2共に台付壺脚部。共に内面ハケ。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

12号溝 1壺口縁。内外面ハケのちナデ。口唇部刻目。色調黒褐色。2台付壺脚部。胎土、焼成良好。色調茶褐色。

14号溝 灯明皿。外面ナデ、両面にスス付着。胎土、焼成良好。色調明茶褐色。

15号溝 1壺口縁。内面ナデ。色調茶褐色。2壺底部。色調暗茶褐色。

(吉岡 弘樹)

第3節 遺構外の出土遺物

a 土器

第I群土器（第39図1～7）

縄文時代早期の土器である。2類に分類される。

第1類土器（1～5）：縄文時代早期前半、押型文系土器である。出土総数は6片と少ない。1は格子目押型文が施された胴部破片。茶褐色を呈し、器厚5mmと薄手のつくりである。

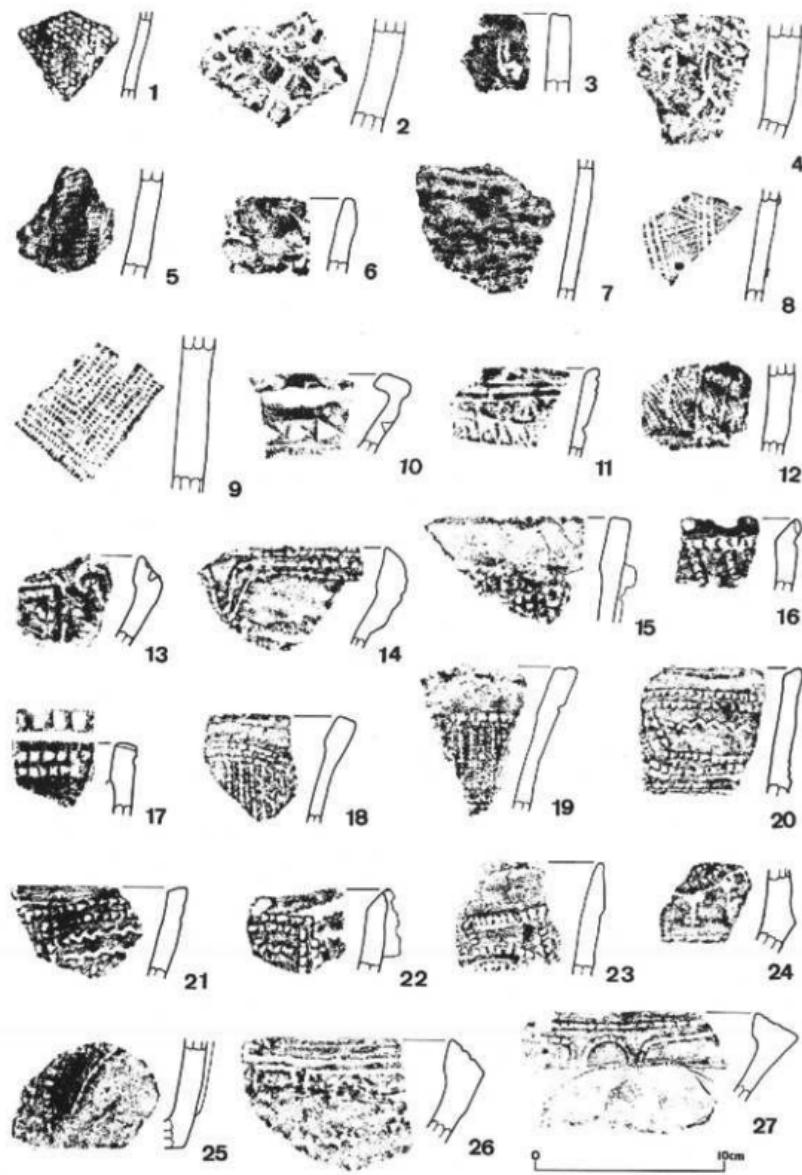
2は粗大な格円押型文が施されるもの。器厚15mmと厚手であり、胎土に砂粒と微量の植物纖維含んでいる。3・4は長さ4cm程の原体を2つ折りにして「U」字状の側面圧痕を施したもの。原体は無筋Rの繩である。胎土に粗い砂粒・石英、さらに植物纖維をやや多く含んでいる。

器厚は12～16mmと厚手。5はR L単節繩文が施された胴部破片である。

1・5にやや不明な点を残すが、2～4は押型文系土器の中でもその終末期に位置づけられている高山寺式系土器に近い段階のものであろう。

第2類土器（6・7）：縄文時代早期後半の土器である。小破片を含めて11片が出土している。

6は平縁の口縁破片。無文土器である。くすんだ褐色を呈し、胎土に植物纖維を多く含んでい



第39圖 遺構外出土土器(1) [1 / 3]

る。7は同様の胴部破片であるが、内・外面に横方向を中心とする擦痕をとどめている。ともに、早期後半、貝殻条痕文系土器の中でも、茅山上層式を含めた新しい段階のものと考えられる。

第Ⅱ群土器（第39図8～12）

縄文時代前期末葉～中期初頭の上器。出土総数は8片と少ない。

8は半截竹管による綾杉状の条痕を地文として、結節状の押引文・ボタン状の貼付文が施される。胎土に石英を含み、堅密なつくりである。9は細い粘土紐を密に貼り付け、さらにヘラ状工具による鋭い刻み目を加えている。器厚16mmと厚手、内面研磨される。10は三角形印刻文を口縁下部にめぐらすもの。11・12は縄文を地文とするもの。原体はともにRL単節調文。11は平縁の口縁部破片であり、三角形状の抉り文や截痕文が施されている。

8は諸磯C式、9は前期終末期の土器、10～12は五領が台式に相当する。

第Ⅲ群土器（第39図13～第40図48）

縄文時代中期前半～中葉の土器である。4類に細別した。

第1類土器（13～27）：主に、楕円形区画により文様帯が構成され、角押文によって特徴づけられるもの。

13・14は細い施文具によって角押文が施されるものの、区画文構成をとらないものである。15～25はほぼ区画文が構成される深鉢形土器であり、13・14に比べ、やや太めの施文具により角押文を描出している。15・18・19・23は口縁上部に幅広の無文帯を残すものであり、19は口唇面にも1列の角押文を加えている。26・27は浅鉢形土器の口縁部破片。一部に「コ」の字状、「アーチ」状の文様が施されている。

第2類土器（28～34）：主に、重帶する三角形区画により文様が構成され、いわゆる三角押文が施されるもの。

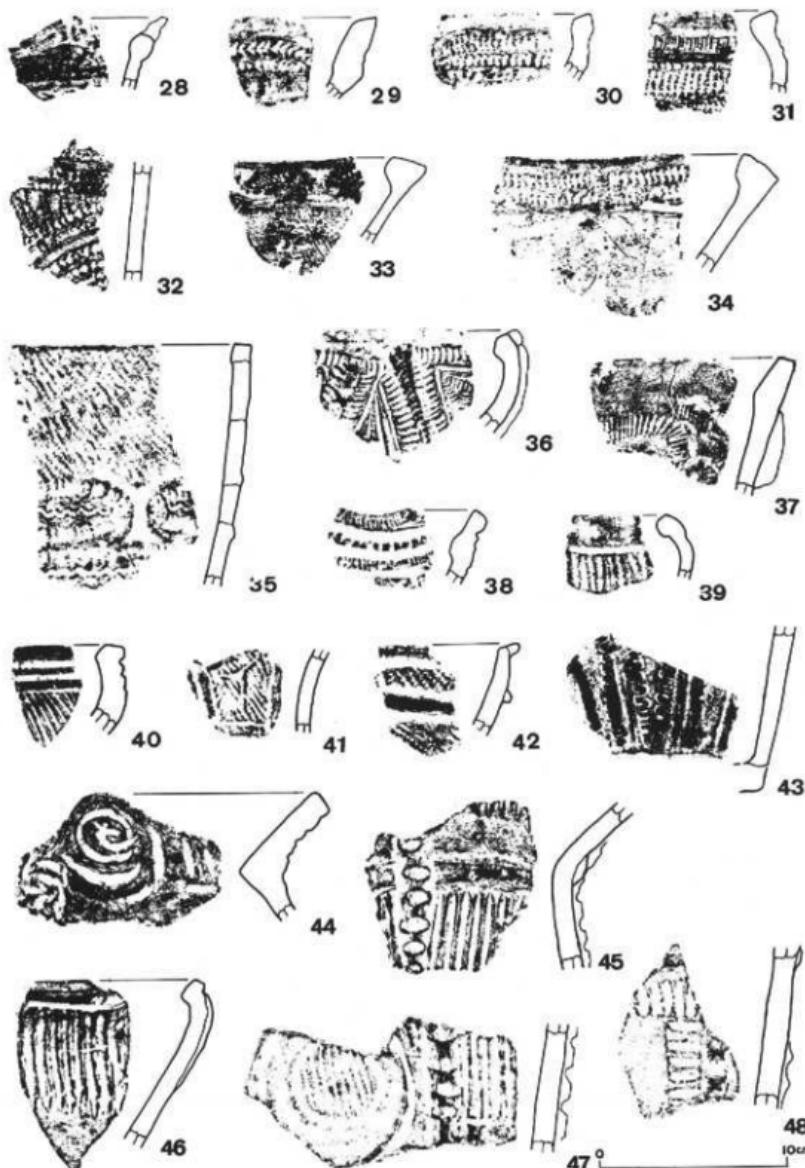
28～32は深鉢形土器。31は上部が内湾する平縁の口縁部破片であり、三角押文とともにキャタピラ文が併用されている。33・34は浅鉢形土器。33は三角押文による「アーチ」状の文様を口縁上部にめぐらし、一部に三角形の抉り文を施している。

第3類土器（35～43）：種々の区画文や抽象文が施されるもので、爪形文やキャタピラ文が多用される。

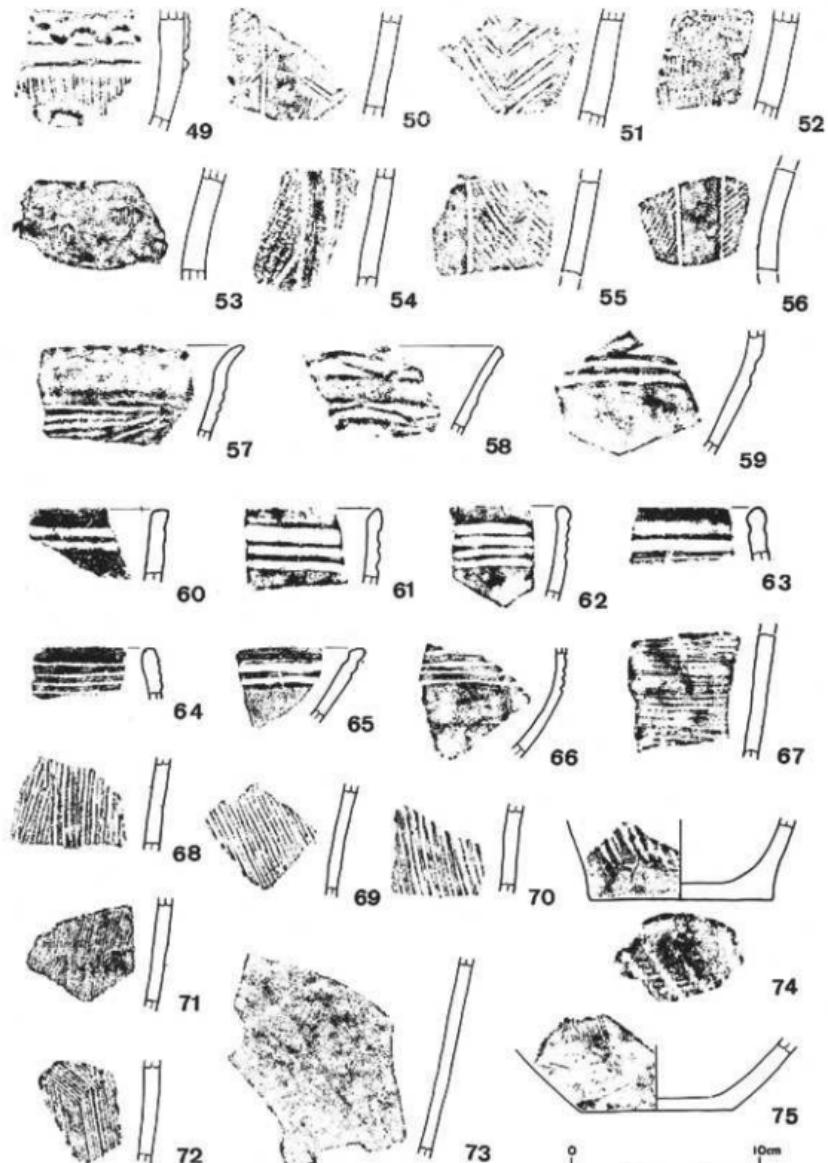
35は平縁の口縁部破片、上部に幅広の縄文帯をめぐらし、以下横帯する楕円区画文を施している。39は口縁上部に一条の沈線がめぐり、胴部に縄文を密に施している。40は区画文が施されるもの。

第4類土器（44～48）：刻み目のある太い隆帯や扁平な貼り付け文により、大柄な文様が構成されるものである。

44は山形状の大きな突起のつく口縁部破片。46は内湾しながら大きく開く平縁の口縁部破片で



第40図 遺構外出土土器(2) [1 / 3]



第41図 遺構外出土土器(3) [1 / 3]

あり、上部に縦位の沈線文をめぐらしている。

第1類土器は猪沢式、第2類土器は新道式、第3類土器・第4類土器はそれぞれ藤内式・井戸尻式に相当しよう。

第IV群土器（第41図49～56）

縄文時代中期後半の土器である。2類に細別した。

第1類土器（49～53）：曾利系土器を一括した。

49は頸部付近の破片であり、直線状・波状の貼り付け文が施されている。50・51は短沈線により、「八」の字状文が施されるもの。52・53は櫛齒状工具による刺突文のみにより文様が構成されている。

第2類土器（54～56）：加曾利E系土器を一括した。

54は隆起線区画内に縄文を充填するもの。55・56はいわゆる磨消縄文が施されるものである。縄文原体は54・56がR L単節縄文、55がL R単節縄文である。

第1類土器49は曾利II式、同50～53は曾利IV～V式に、第2類土器54～56は加曾利E III～IV式に比定される。

第V群土器（第41図57～75）

縄文時代晩期末葉の土器である。

57～59は浮線網状文が施されるもの。57・58は胎土に砂粒・石英・白色不透明粒子を多く含み、器壁は粗い。59は内・外面ともに研磨されている。60～66は口縁上部に数条の沈線をめぐらすものであり、63・65は内面に1条の回線がめぐらしている。内・外面ともに研磨される。66の沈線文部には赤色塗彩の痕跡をとどめている。60～64は深鉢形土器、65・66は鉢形土器であろう。67～72・74・75は条痕文が施されるものである。67～70・74は粗い条痕文、71・72・75は繊細な条痕文がそれぞれ施される。74・75は底部破片であり、74の底面には「網代痕」をとどめている。73は無文の胴部破片である。外面斜位・内面横～斜位の研磨が加えられており、焼成も堅緻である。

57～59は水式に比定される。他も同様の時期の所産であろう。

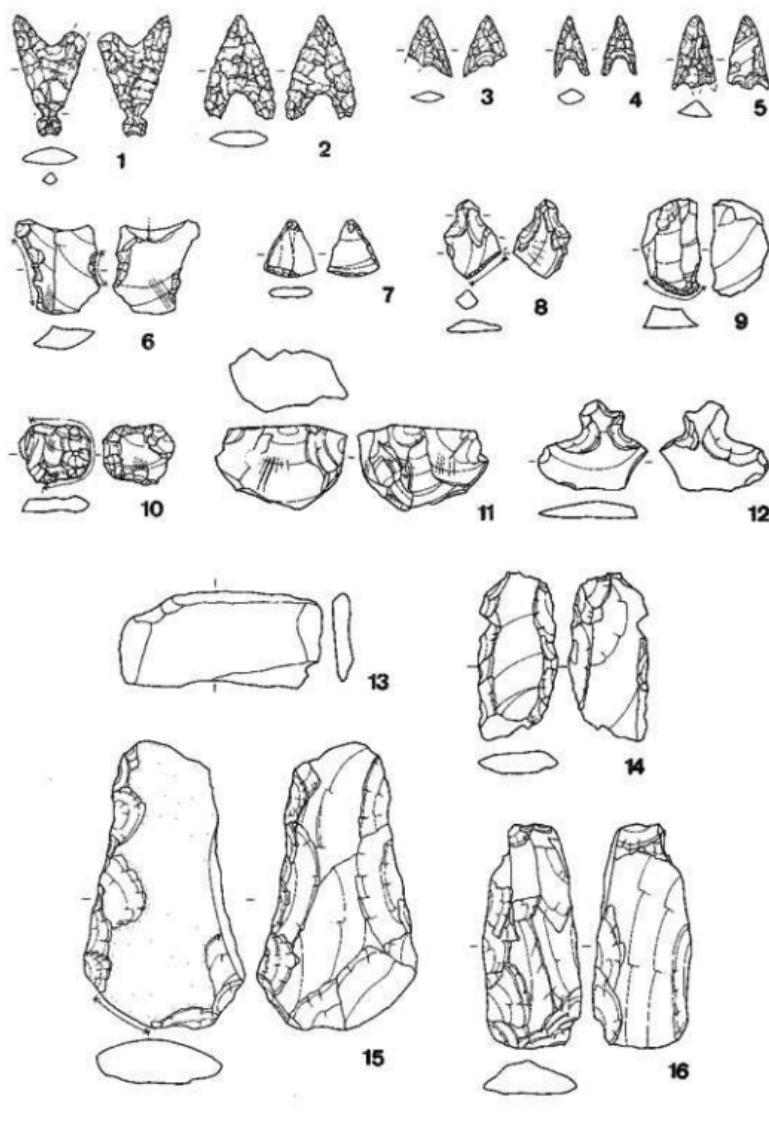
土製品（第42図1・2）

1は径24cm、厚さ3cmをはかる円盤状の器台である。4分の3を欠損する。2は3.1×3.4cmと小型の土製円板である。

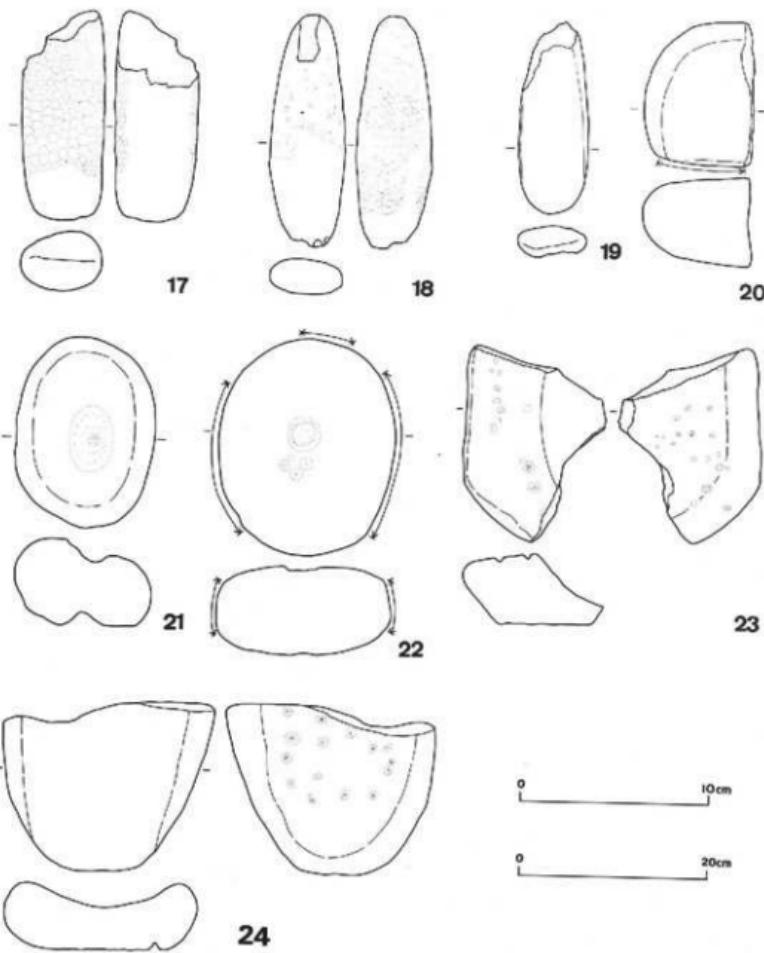


第42図 遺構外出土土製品 [1/3]

(百瀬 忠幸)



第43図 遺構外石器(1) [1/3, 2/3]



第44図 遺構外出土石器(2) [1/3、1/6]

b 石器 (第43~44図、図版8)

ここで扱う石器類は、遺構外出土のものと、遺構出土のものであっても、明らかに、その遺構とは時間的に同一でない資料である。

1~5 石鏃。石質：1はチャート、2~5は黒曜石。1・17号溝出土。雁股状の石鏃。

2. 12号溝出土。3. 3号住居址出土。4. 2号住居址出土。5. 15号溝出土。有茎鐵。某部欠損。6~10. スクレイパー。石質：全て黒曜石。6. 14号溝出土。サイドスクレイパー。実測図裏面の矢印部分は打点。7. 13号溝出土。全周に、使用による細かい剝離がある。8. 表採。矢印範囲には、使用による細かい剝離がある。9. 表採。10. 15号溝出土。矢印範囲が調整部分。11. 石核。14号溝出土。石質：黒曜石。打点は4ヶ所確認できる。打面は筋理面。12. 粗製石匙。石質：ホルンフェルス。13号溝出土。器面の風化著しく、剝離状態の観察不可能。13. 横刃形石器。石質：ホルンフェルス。13号溝出土。器面の風化著しく、剝離状態の観察不可能。14~16. 打製石斧。14. 短冊形。13号溝出土。石質：ホルンフェルス。素材は横長剝片。15. 捶形。12号溝出土。石質：片状砂岩。矢印範囲は、刃部が摩耗している。16. 短冊形。1号住居跡掘り方出土。石質：頁岩。17~19. 磨製石斧。17. 乳棒状磨製石斧。表採。石質：超塩基性岩。器面には成形痕（敲打痕）が多く残っている。18. 不整形の磨製石斧。13号溝出土。石質：超塩基性岩。成形痕（敲打痕）が多く残っている。刃部はほとんど破損している。19. 不整形の磨製石斧。表採。石質：凝灰岩。20. 磨石。12号溝出土。石質：安山岩。全体によく磨耗している。特に矢印範囲は著しく磨り減っている。21. 磨石+凹岩。表採。石質：凝灰岩。凹部分の周囲約1cmが磨耗している。22. 磨石+敲石。16号溝出土。石質：安山岩。点線部分は少しくぼんでいる。これは、整った円錐形ではなく、粗雑で浅い（約2mm）。裏面にも同様のものがある。矢印範囲には敲打痕がある。23. 24. 石皿。両方とも14号溝から出土し、石質は安山岩で円錐状の皿を有する。以上、図示した資料の他に、次のものが出土している。打製石斧19点（短冊形16・撃形4・分削形2：頁岩5・結板岩2・ホルンフェルス3・安山岩1・砂岩4・片麻岩1・泥岩1・凝灰岩1）。粗製石匙1点（ホルンフェルス）。石鍬2点（黒曜石）。石核2点（黒曜石）。磨製石斧4点（乳棒状3：砂岩1・綠泥片岩1・超塩基性岩1・定角式1：砂岩）。石皿2点（凹・有1・凹・無1：安山岩）。磨石+敲石3点（安山岩3）。磨石2点（安山岩1・砂岩1）。凹石2点（安山岩1・凝灰岩1）。加工痕ある剝片2点（黒曜石2）。使用痕ある剝片1点（黒曜石）。剝片類180点（黒曜石169・チャート3・水晶3・ホルンフェルス3・安山岩1・頁岩1）。以上述べてきた石器に対して、石器石材の同定をしていただいた紫田徹氏の产地推定によれば、15の打製石斧の石材となった片状砂岩は、小仏層群が产地で、また、様々な石器の材料となったホルンフェルスの产地は大菩薩岬付近であるということである。

（大森 隆志）

第V章 成果と課題

第1節 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土器の分布と遺構のうごき (第45図1~3)

縄文時代早期：第I群上器の時期である。本期に伴う遺構の存在は一切不明である。出土し

た遺物もきわめて微量にとどまるものであったが、前半に比定される第1類土器（押型文系土器）は、発掘区中央部G～I-34～39グリッドにかけて、後半に比定される第2類土器（貝殻条痕文系土器）は、発掘区西部K～O-5～8グリッドおよびN・O-13～16グリッドにかけてそれぞれ分布していた。

縄文時代前期後葉～中期初頭：第Ⅱ群土器の時期に相当する。前代同様遺構の存在は確認されていない。遺物は発掘区全体に散漫な分布を示していた。

縄文時代中期前半～中葉：第Ⅲ群土器の時期。4期に細分される。

貉沢式期（第1類土器）一遺構は検出されていない。遺物はK～P-5～9グリッドおよびM～O-15～22グリッドにかけて、対峙した分布をみせていた。比較的まとまった量の遺物が検出されていることから、上述のグリッドを中心とする調査区域外に、何らかの遺構が営まれていた可能性は少なくないであろう。

新道式期（第2類土器）一第9号住居址が検出されているのみである。遺物は住居址を中心として、I～N-2～7グリッドに多く遺存していた。

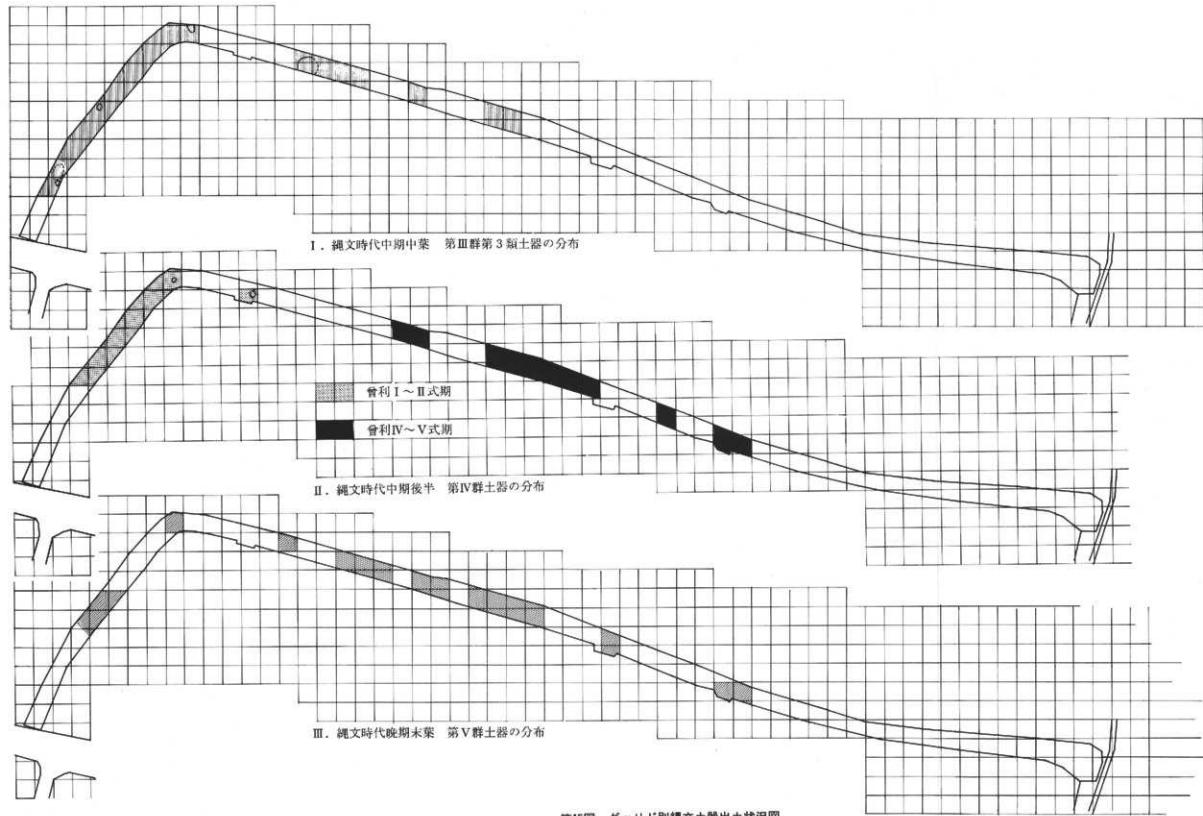
新道式期（第2類土器）一第9号住居址が検出されているのみである。遺物は住居址を中心として、I～N-2～7グリッドに多く遺存していた。

藤内式期（第3類土器）（第45図・1）一第7号住居址、5号・13号・14号土塙、1号集石遺構が本期に帰属される。前代において居住域とされていた発掘区西端部に、墓壇的・祭祀的様相を帯びた土塙群や集石遺構が営まれるようになり、それに応じて、住居址群は発掘区中央部よりに移行する。遺物は第7号住居址覆土中および、土塙群が検出されたF～O-2～8グリッドに広く分布していた。

井戸尻式期（第4類土器）一第8号住居址が検出されている。第7号住居址とは8m程離れるのみである。遺物は住居址床面上に一括出土したものを除き、他は、M～P-6～9グリッドを中心としてまばらに分布していたにすぎない。

縄文時代中期後半（第45図・2）：第Ⅳ群土器の時期に相当する。7号土塙および12号土塙が検出されている。後者にやや不明な点を残すものの、ともに墓壇的色彩をもつものであった。12号土塙は前代の第8号住居址床面を切り込んで造られており、中期前半～中葉、藤内式期にみられたものと同様な機能空間の占地変化の一端を示している。遺物は時間的・空間的に大きく2群に分けることが可能であり、曾利Ⅰ～Ⅱ式に代表される古段階はP-8・9グリッドを中心として、曾利Ⅳ～Vに代表される新段階はI～L-26～31グリッドにかけて、それぞれ空間を異にした分布が認められた。

縄文時代晩期末葉（第45図・3）：第Ⅴ群土器の時期である。遺構は検出されなかつものの、K～N-19～27グリッドにかけて、比較的まとまった量の遺物が出土している。該期における遺跡の多くが立地上低湿地化傾向を示すなかで、台地上に占地する本遺跡のあり方はやや特異といえ、今後は、生業形態の相異なる複合、あるいは季節的な移動といった多方面からの検討が必要であると思われる。



第45図 ゲッリド別縄文土器出土状況図

(2) 住居形態および集落形態の変化（第46図）

今回の調査で検出された縄文時代の住居址3軒はすべて中期に属するものであり、先にも詳述したように、中期前半、新道式期1軒、中期中葉、藤内式期1軒、同、井戸尻式期1軒という内訳であった。ここでは、住居址の個別的な説明は先の記述に譲り、これら3軒、3時期にわたる住居址相互の形態的相異、また、さらに進んで集落形態の変化といった問題について若干の整理を行いたい。

新道式期に属する第9号住居址は、発掘区西端部K-4・5グリッドを中心に存在する。溝址による擾乱等により全体の形狀は明らかにしえないが、おおむね円形～椭円形を呈するものと思われる。柱穴とも考えられるピット5ヶ所が認められるものの、規則的な配置をとっているとはいがたい。ローム面を若干掘り込んで床面としており、住居址のほぼ中央部に埋甕炉を設けている。炉体上部は口縁部および胴下部を欠損するものの、現在高16cm、最大径26cmをはかる。炉の周囲および炉内には焼土の堆積が顕著にみとめられ、炉体土器も上端部を中心に二次焼成を被っていた。

藤内式期の所産と考えられる第7号住居址は覆土中の遺物がいわゆる“吹上パターン”に近似したあり方を呈していたことによって注目された。ローム層を深く掘り込んで構築されているものの、第9号住居址同様、柱穴の配置は不明瞭である。平面形は不整円形を呈し、ほぼ中央部に石圓炉が作られている。検出時は「L」字状をとどめるのみであったが、本來は内辺50～60cm程度をはかる方形の石圓炉であったと思われる。炉の深さは縁石の上端より15cm程度をはかるのみで比較的浅いつくりである。

井戸尻式期末に帰属する第8号住居址は、上述の第7号住居址とは対象的に、略丸形および大形破片が床面上に一括遺存しており、一般に“井戸尻パターン”と称されてきた遺物の出土状態を呈していたことが注意された。ローム層を全く掘りこまず、ローム層上面を床面としている。土塙に切られていることもあって全体の形狀に不明な点を残すが、径6～7m程の規模が推定される。柱穴と考えられるピットもいくつか検出されているが、定形的な配列とはなりえていない。

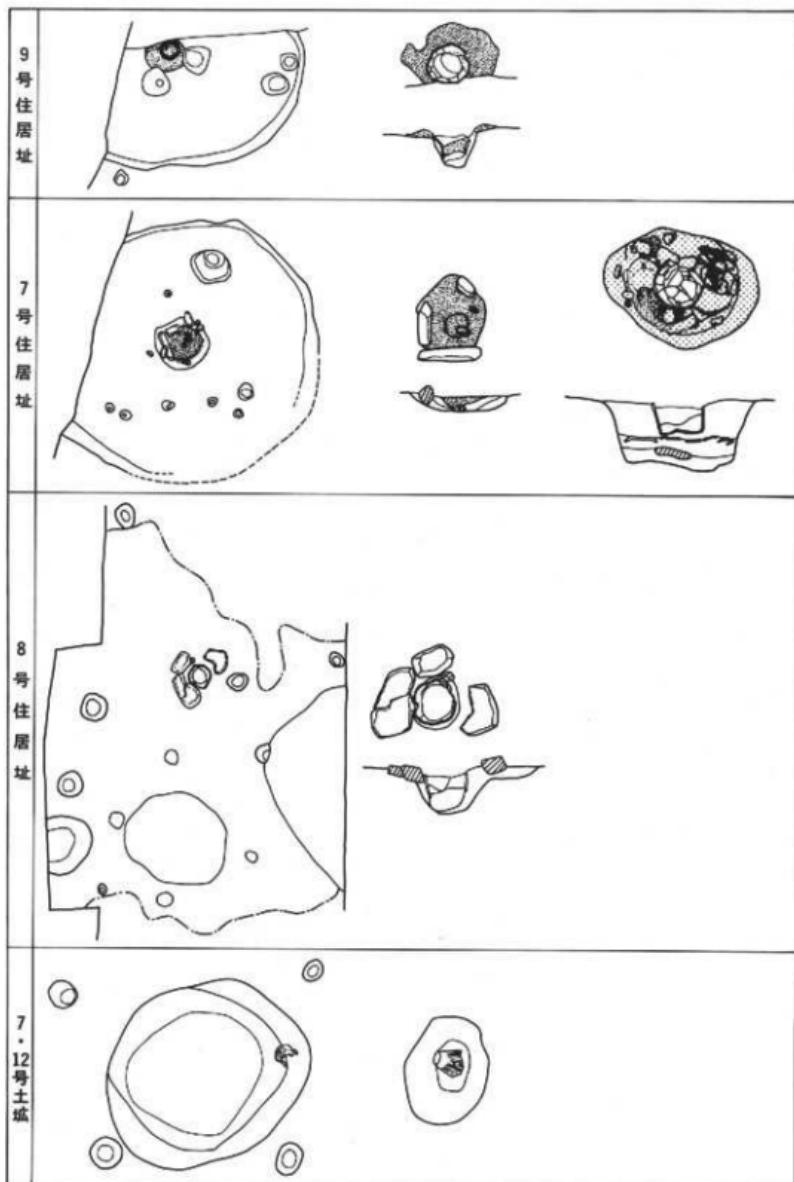
炉址は扁平な大形礫と口縁部および胴下部を欠く深鉢形土器とによって石圓埋甕炉としている。

本來は現存するものと同様な大形礫が全周していただことが考えられ、略円形、石の内辺40cm程度をなしていたものと思われる。縁石上端よりの深さは35cm程と深めである。

以上、今回検出された縄文時代の住居址について、時期を追ってその概略を述べた。そこでも明らかなように、良好な保存状態を保つて検出された住居址が皆無であったことから、時期を異にする各々の住居址の総括的な検討は困難といわざるをえない。とはいって、次に列記するように、いくつかの問題点を指摘することは可能であると思われる。

(1) 中期前半～中葉の所産である3軒の住居址は、ともに、柱穴配置が規則的とはなりえていない。

(2) 新道式期に比定される第9号住居址と藤内式期に比定される第7号住居址は、ともに程度



第46図 縄文時代遺構変遷図

の差こそあれ、ローム層を掘り込んでいるのに対し、井戸尻式期の中でも新しい段階に帰属する第8号住居址はローム層上面を床面としている。ローム層を掘り込まずにその上面を床面としている例は、井戸尻式期末における住居址に多く見られるようであり、中期中葉～中期後半に移り変わる変革点として、住居址構造の変化にとどまらず、集落構造ひいては集落相互の諸関係に大きな変動が認められる該期の一様相を物語るものと解することもできよう。

(3) 炉形態については、新道式期～埋甕炉、藤内式期～(方形)石圓炉、井戸尻式期～(円形)石圓炉埋甕炉という変遷が認められる。本遺跡で確認された、この埋甕炉→(方形)石圓炉→(円形)石圓埋甕炉という新道式期～井戸尻式期における炉形態の変遷は、おむね、それぞれの時期における一般的な方として理解できる。

(4) 藤内式期と曾利式期には、それぞれ前代とのあいだに、土塙群を含めた集落構造の変化が想定される。先にも述べたように、住居址への土塙群の接近・重複、さらに、土器の分布上の差違などによって示されるこの変化は、発掘区城が幅4mのトレント状をなすことにとどまることから、一概に断定すべきではないものの、上塙・集石の多くが墓地的・祭祀的様相を強くもつことを重視するならば、居住域の墓域ないし祭祀的な場への変化、すなわち、日常的な空間から非日常的な空間への変化、あるいは居住空間の移動として把えうる可能性を多くに内包しているものと考えられる。藤内式期の中でも古い段階および井戸尻式期末から曾利式期にかけての段階、さらに、曾利式期の新しい段階において把えられるこの集落構造の変遷は、本遺跡のみならず、八ヶ岳山麓を含めた長野県域でも同様に認められ、今後は、こうした前提に立って、そうした“うごき”をもたらすことになった社会的背景を、旧来の視点にとらわれないより広い視野から探ることが強く要求されよう。

以上、本遺跡から得られた縄文時代の遺構・遺物についての雑薄な整理を行ってきたが、その検討の曖昧さや不十分さは別にして、第8号住居址・括出土土器や13号上塙など従来類例に乏しかった資料を提出したことの重要性は高いと考えられる。

(百瀬 忠幸)

第2節 古墳時代以降の遺構と遺物

今回の調査によって検出された古墳時代以降の遺構は、住居址6軒、土塙3基、溝状遺構17本を数えた。特に溝状遺構は約300mの発掘区のほぼ全域に亘って検出され、その有様は本遺跡の特異性を示すものである。ここでは住居址(集落)、溝状遺構との二種に大別し、その関連性をも考慮しつつ若干の検討を加えたい。

a 住居址(集落)について

本調査によって検出された住居址は6軒を数える。しかし発掘区が4m巾であるという条件に制約されて完掘した住居址はない。また、前述した溝状遺構の存在、耕作による削平等により、遺存状態は極めて悪く、遺構本来の姿を窺うには充分とはいえない。検出された6軒の住居址のうち、その1/2以上を確認したものは3号住居址1軒のみであり、推定を加えても住居址

の形態、規模を判断しえるものは2号～5号の各住居址の4軒である。そのうち3号住居址が不整円形を呈し、他は隅丸長方形を呈すると考えられる。規模も明確にはしえないが、3号住居址が径2.5～3mを測るものと考えられ、他は全て一辺のみの計数値であるが、4.1～5.1m程度で県内当該期の住居址例に比較してもほぼ平均的な数値である。主軸方位もN-20°Eを中心にしており僅か4軒の推定値による検討ではあるが、ほぼ同一方位をとるものといえよう。

住居址の時期については、時代決定の根拠となりうる上器の出土が少なく、住居址間相互における前後関係の確定也不可能であり、切りあい関係にあった1号住居址→2号住居址、5号住居址→6号住居址の前後関係が確認しうるのみであった。県内特に陝西地域に於いてその土器内容が明らかにされている遺跡は甲西町・住吉遺跡、櫛形町・六科丘遺跡、同曾根遺跡等があげられるがそれらと本遺跡とを比較すると、台付甕、小型壺など住吉遺跡例とは系統的に異質であり、時代的にも本遺跡例は後出するものといえる。六科丘遺跡例とも若干平行しつつも、やや後出るものであり、古墳時代初頭の年代を与えておきたい。

ところで一般的に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての住居址形態の変遷は関東南部・静岡県東部では、小判形・不整円形から隅丸方形へ移行するといわれている。本遺跡においては3号住居址が不整円形を呈し、規模も他に比し小型である。上器からみる限り、3号住居址が他住居址に比し、時代的に遅るとは考えられず3号住居址に認められる形態的な特殊性は同一時期集落内における社会構成上の何らかの要因を考えるべきものといえよう。

遺跡は東一西にのびる台地の北縁に位置し、東端には小谷が刻まれている。集落は遺跡の東半部小谷を望む台地縁辺に形成されている。更に漆川によって開拓された谷をへだて、北方六科山丘陵南西面には六科丘遺跡が存在して対照している。台地上に巾幅か4m区域を設けただけの発掘であり集落の一部を確認したに過ぎず、本来の集落の規模、形態等は勿論明らかにしえたわけではない。その段階で集落の内容、性格等に言及する事は避けねばならないが、ともかく甲府盆地西縁の丘陵縁辺に位置する上の山遺跡の存在は、近隣する住吉遺跡、六科丘遺跡、曾根遺跡等と共に甲府盆地における古墳時代成立を考えるうえでその社会の発展・成熟の過程、あるいは多様性を窺わせる点でも興味深い。

b 溝状遺構

本遺跡から検出された17本の溝状遺構にどの様な年代を与えるべきかについては判断資料となりうる遺物に乏しく判断をなしえるのが実情であるがとりあえず遺構の断面形態、覆土等から若干の分析を行なった。まず断面形態であるが、I類として1・2・7号の各溝状遺構は漏斗状を呈している。II類として3・4・9・10・14A・14B・17号の各溝状遺構は逆台形を呈し、III類として6・8・11・12号の各溝状遺構は深鉢形を呈している。

尚、8号溝状遺構は何本かの溝状遺構を収束した様相を示しており、W字状断面を持つものともいえる。次いで覆土の様相についてであるが、A類として2・3・4・9・10・11・12号の各溝状遺構は黒褐色土層の堆積が顕著である。B類として6・7・8・14A・14B・17号の各溝状遺構

はローム粒の混入が顕著で黒褐色土粒は混入するものの単一層としての形態をなしてはいない。最後にC類として1号溝状遺構ではロームブロック、黄白色軽石ブロックが人為的堆積の様相を示している。また、14B、17号溝状遺構はその状態は異とするものの覆土内に礫の存在が顕著である。A類の黒褐色土は本遺跡基本土層中には見出されず、14号土地を除く古墳時代初頭の所産とした住居址、土塙覆土上に認められたものである。勿論肉眼観察によるもので、土壤学的分析を経たものではないが示唆に富む様相といえよう。出土遺物についても3・4・9・10・12号の各溝状遺構からは、古墳時代初頭の遺物を中心として、2・7・14B号各溝状遺構からは中世以降の遺物を中心として認められている。特に3号溝状遺構覆土からは焼成後底部穿孔された大型壺が遺棄された状態で検出された。壺は2／3個体程出土しており、完全な球形の胴部からやや内湾気味に立ち上がりて折り返し口縁部に至る形状を持つもので古墳時代初頭の年代を考えたい。平面的には、9・10号及び11・12号溝状遺構が興味ある状態で検出されている。すなわち、9・10号溝状遺構は両者で「ハ」の字形を示しており、発掘区北側で直交する位置関係になる。前述した様に覆土、断面形などからも別個の溝とするより同一の溝と考えた方が妥当性がある。また11・12号溝状遺構についても11号溝は「く」の字形に折れ12号溝に対して一辺は平行し、他辺は直交する関係となる。この両者も覆土、断面形など共通する要素をもち、一辺9m程を測り平面「コ」の字形或いは方形を呈する同一の溝と考えたい。更に各々の内側にあたる壁が外側の壁に対して、急角度の立ち上がりをみせ同一の溝とする傍証ともなろう。道路巾の発掘の為、全容を確認する事は不可能で、推測にたよる部分が少なくないとはいえ、底部穿孔土器を出土した3号溝及びそれと共に通する覆土を持ち、前述した様な傾向を示す9・10号及び11・12号溝状遺構に関して方形周溝墓の可能性を指摘しておきたい。

仮にこの二者を方形周溝墓とする事が可能であるならば住吉遺跡から検出されている方形周溝墓などと共に、県内における弥生時代末期から古墳時代への過程を検討する上で重要な資料を提供したものといえよう。

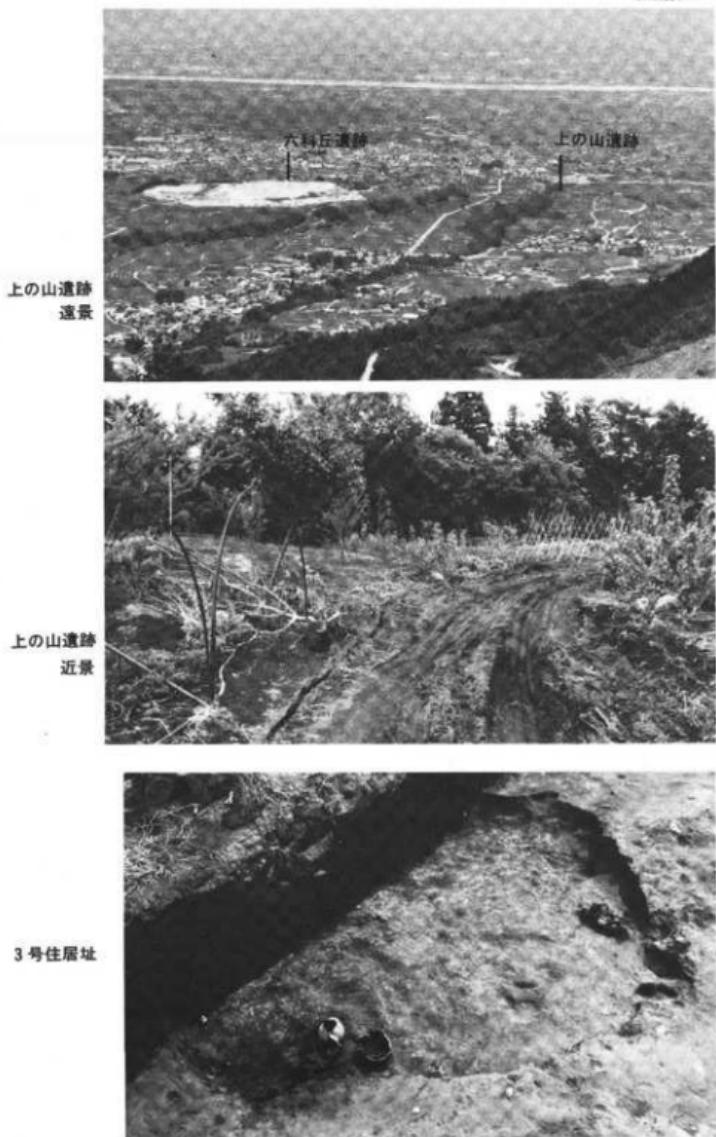
紙数の関係上、方形周溝墓と集落址との関係、それらの山梨県内における歴史的位置、また中世の遺物を伴う溝状遺構の問題について全く言及できなかった。それらについては今後、検討・報告する責務のあることを最後に明記しておきたい。

(清水 博)

引用・参考文献

- ① 文化庁・文化財保護部「全国遺跡地図一山梨県」 国土地理協会 1981
- ② 松浦宥一郎他「猪見塚古墳」 榛原町教育委員会 1983
- ③ 間根孝夫他「六・科・丘」 1983 六科丘遺跡調査団
- ④ 住吉遺跡調査「住吉遺跡」 甲西町教育委員会 1981
- 山崎金夫「西田遺跡」 山梨県遺跡調査団 1978
木本健也「山梨県數々町金の尾遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』36 1980
- 「豆塚遺跡」 山梨県教育委員会 1984
- 小林広和他「上の平」 山梨県教育委員会 1980
- 佐々木藤哉他「帷子崎遺跡」 横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会 1984
横井博文「甲府盆地の古墳時代における政治過程」
『甲府盆地—その歴史と地域性』 地方史研究協議会 1984
- 佐原真一他「弥生式土器、I・II」 ニュー・サイエンス社 1983

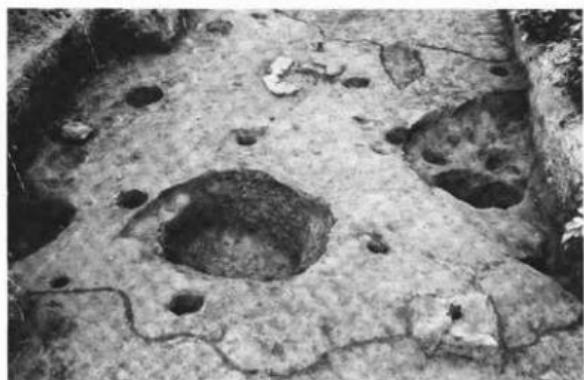
図版 1



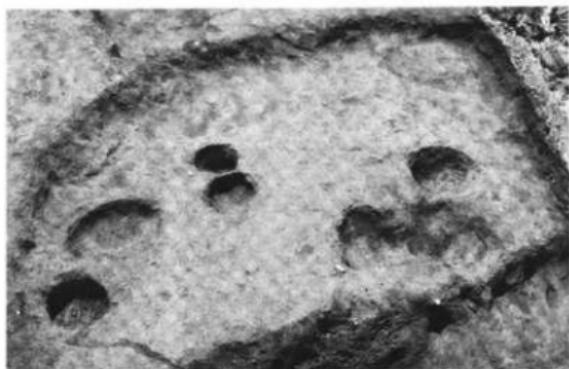
图版 2



7号住居址

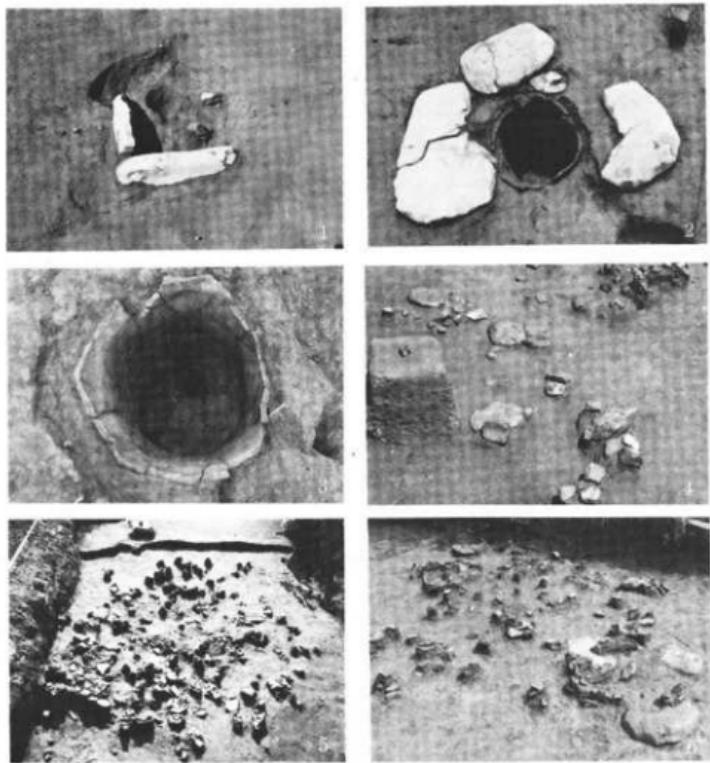


8号住居址

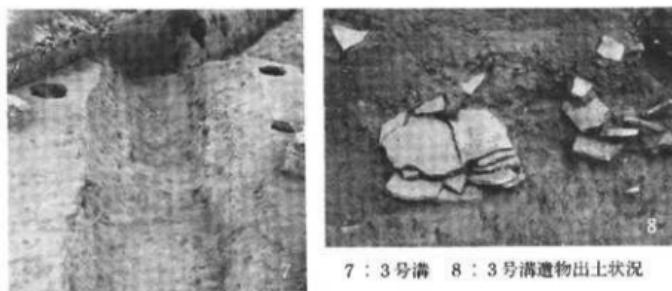


9号住居址

図版 3

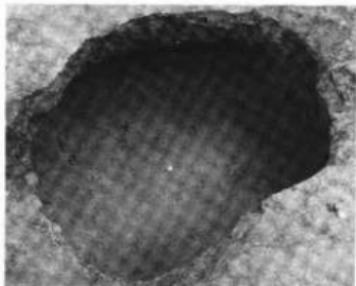


1 : 7号住居址炉址 2 : 8号住居址炉址 3 : 9号住居址炉址
4 : 1号集石遺構 5 : 7号住居址遺物出土状況 6 : 8号住居址遺物出土状況

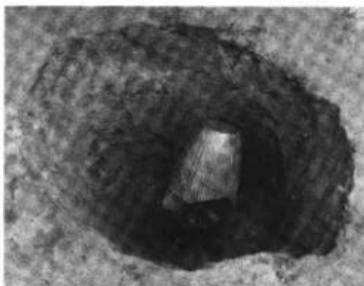


7 : 3号溝 8 : 3号溝遺物出土状況

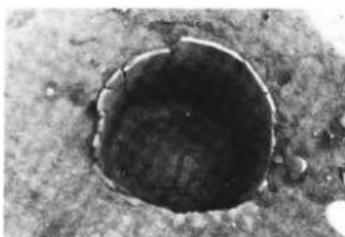
图版 4



4号土壤



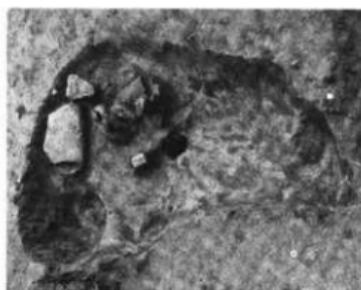
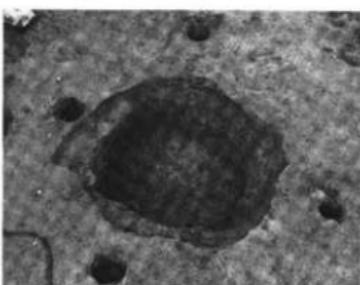
7号土壤



12号土壤



上) 13号土壤、埋藏
下) 13号土壤



17号土壤

图版 5



出土遗物 一土器(1) —

1 : 2号住居址 2·3 : 3号住居址 4·5 : 4号住居址

6 : 2号土壤 7 : 3号溝

図版 6



1



2



3



4



5



6



7



8

出土遺物 一土器および土偶(2)一

1・2：7号住居址 3～7：8号住居址 8：9号住居址

図版 7



1



2



3



4



5



6



7

出土遺物

—土器(3)—

1 : 1号集石遺構

2 : 5号土壤

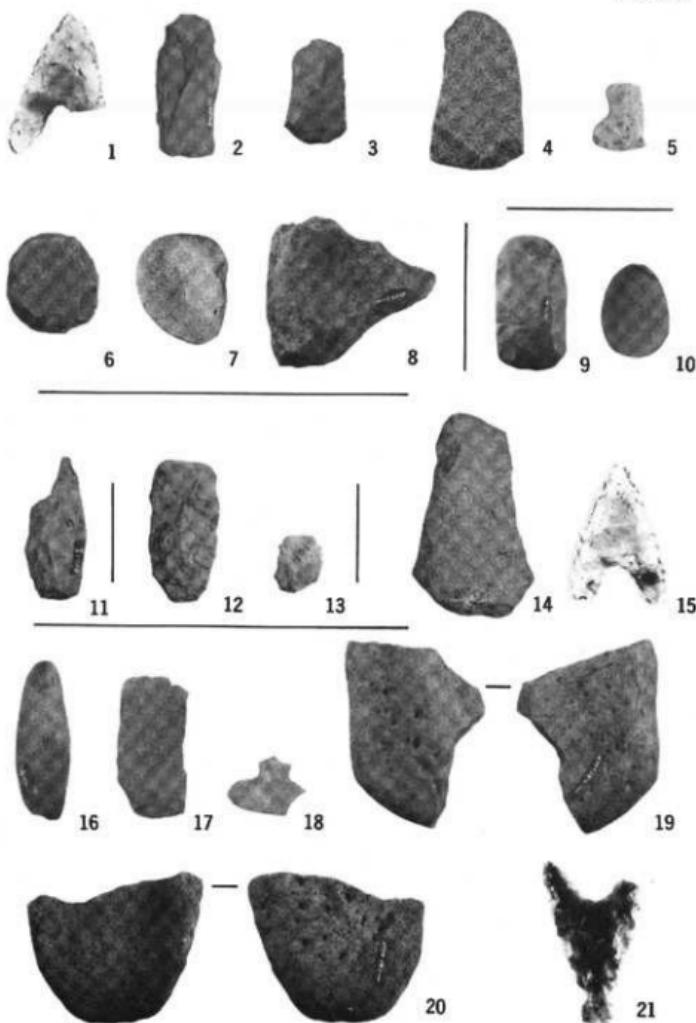
3 : 7号土壤

4 : 12号土壤

5・6 : 13号土壤

7 : 14号土壤

図版 8



出土遺物 一石器一

1~8: 7号住居址 9·10: 8号住居址

11: 1号集石遺構 12: 4号土壤

13: 5号土壤 14·15: 12号溝

16~18: 13号溝 19·20: 14号溝 21: 17号溝

櫛形町文化財調査報告書 No.2

上 の 山 遺 跡

昭和60年3月31日発行

編集 櫛形町教育委員会
発行者 山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原

印刷 野中印刷、櫛形町小笠原
